
東方甲冑劇

牧野司郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方甲冑劇

【Nコード】

N8002L

【作者名】

牧野司郎

【あらすじ】

私は普通の甲冑だ、ただ、ちょっと手足が動かせるだけで…別にデュラハンとかではないぞ？そんな物あるわけないでしょう、化学的に考えて（キリッ）

しかし…俺の前に飾ってある奴は違かった、夜な夜な動いては鉄臭くなつて帰ってくる、手に持った剣も赤く染めて

東方の二次創作物です、デュラハンが好き過ぎたのが原因です

2 作者はストーリー構成能力、文構成能力が壊滅しているため、ちよくちよくアドバイスなどを下さい…あれ？俺にいい所無くね？

〇〇（前書き）

何卒宜しくお願いします

中世頃だったろうか？私が作られたのは

その人物は人形を作っていたが、富豪からの依頼らしく、珍しく甲冑を作ったそうだが、まあ、私だった訳だが…

なんでもその人物が作る人形には命が籠る、とかで、富豪からはかなりの評判だったらしい

ええっと、作ってる人形の名前は何だっけな…

ロ、ローゼンタール？…違う

ローゼスマンデン、だったかな…違うか

まあ、ローゼン イデンだか、ーゼンメイデンだかを作っていたらしい

私は白銀に金色の装飾をされた、いかにも高級そうな甲冑だったらしい、所詮観賞用だが、戦場に送り出しても傷一つ付かないだろう、と言われた事もある

で、私とその富豪の家に送られて、最初に喜んだのはその富豪の子供の二人だった、一人は薄い青色の髪、もう一人は薄い黄色の髪の子供だった

十歳前後の前者はカリスマ気取りのお子様

五歳前後の后者は活発なお子様

大変幸せそうな家族だった、私も混ざって遊びたいくらいだったが、あの時は動かなかったし

それから三年ほど経っただろうか

新しい甲冑が届いた、真っ黒で刺々しいフォルムのいかにも悪役つて感じの奴だが、それが来た時も二人の子供は喜んだ、私は仲間ができたような気分…今でならなったのだろうか、だって、あの時鉄屑だし

そして更に三年、ここからだろうか、私が体が動くようになったのはそして、一つの異変にも気が付いた、二人の子供がまったく成長し

ないのだ、身長的な問題ではなく、全てがだ

そして、犬歯が以上に成長し、背中に翼のような物も生え始めた、親はそれを見て泣いていたが、前向きな親だったようで、子供達と夜にピクニックに行ったりして楽しんでいたらしい、幸せそうに今なら分かる気がする、子供達は…吸血鬼だったのでは無かったのだろうか？

まあ、そんな少し変わってはいるが、幸せな日々が続いたある日私の向かい側の黒い奴、まあ、子供達が付けた名はクロちゃんだったが…

ちなみに上の方、まあ、先程で言う前者は無性に長い名前を付けていた、(クロック・ナイトメア・アレクサンドロスだったか?)で、下の方が、長いからクロちゃんでもいいや、という事で決定したちなみに五歳差があったのだが、どちらも10歳程度で成長が止まっているため、もはやどちらが上か下か分からない

…おっと、話がそれたな、で、向こう側の奴が…動いた

そして、窓を開け、飛び降り、何処かへ走り去る

そんな日が三日続いた

で、四日目、私はいい加減、自重しろや、と思い止めに入った訳だ飾り用とはいえ、剣は作られていた、私のは、所謂両手で持つような剣で、先の方が扇状に広がっている、という物だった

クロちゃんは、普通に長い剣なのだが、刃が細かく分かれており、相手の肉をスタスタに切り裂く設計をされていた、そして何より、クロちゃんは、帰ってきた後、血がこびり付いた剣を研いでいるのだ、剣の切れ味は落ちていないだろう、私のは使ってもいないから落ちてもないがな

で、止めに入った訳だ、最初に右手でクロちゃんの肩を掴む、クロちゃんは驚いた様子で、こちらに刃を向けてくる、ここから惨劇が始まった

まず最初に、私はその剣で、クロちゃんの右肩を切り落とそうとし

た、しかし剣で受け止めらる、私は素早く剣を引き、扇状の形を生かして、剣を地面に叩き落す、そして、クロちゃんの胸元に蹴りを入れる、クロちゃんは後ろに吹き飛ぶ、そこだ、急にドアが開いたのは、物音を立てた所為で、親が起きたのだ、甲冑が動き、戦っている姿を見て、驚いている、そして、クロちゃんは、容赦無く、まずは父親の首を刈り落とし、そのまま流れるような動きで母親の胴体を真っ二つにする

それをみて、私は怒りに溺れた

そしてしばらくクロちゃんとの攻防が続いた結果、起きてきた子供達が現れた…

しまった、と思った、一瞬そちらに気をとられたのだ

そして、クロちゃんは私の頭を跳ね飛ばす、別に痛みは無いが、衝撃で、少し揺らぐ、そしてクロちゃんは、俺の頭を踏み潰す

ああ、私のイケメンフェイスがっ…

しかし、子供達は引き換ええず、こちらに來た所為で、親の死体を見る

そして、上の子は泣き崩れ

下の子は…クロちゃんにパーの右手を突き出した

私には何の行為か分からなかったが、下の子が、拳を握り締めるとクロちゃんは破裂、いや、破壊された、そして次に私に右手を向けてくる、で、ここからは現在進行形だ

今、足元が急に無くなった…Why?

そして、私は下へ落ちる、途中で、金色の髪の変わった紫色の服装に紫の傘を持った人物と出会う、で、こう言われたよ

『貴方が何も隠さずに動ける世界へようこそ』って…な

で、先程の話があり、只今私は落下中、という訳だ

正直に言うとうと地面に下るして欲しかったのだが、只今上空二千メートルほどから落下中だ

まあ、落ちるだけなら別にバラバラになるか埋るかで終わるから良いんだけどな…下に人がいるんだ、知ってるか？建築物の屋上からパチンコ玉を落とすと人の体を綺麗に貫通するんDA、で、計200Kgは軽く超えている金属の塊が上空二千メートルから落ちてきたらどうなるか？

そりゃあ、決まっている、粉々だよ、粉々、カーナーリスプラッターシーンが見える

というか、地面が一面お花畑ですよ？え？何？死んだの？私死んだ？いえいえ、あんな綺麗なのが天国はずがない、ってか死後の世界は無いつて偉い人が言っていたし…

それよか、下で悠長に傘を広げてる人物に言いたい、

『上から来るぞ！気をつける！』

いや、顔無いから言えないし、そもそも喋れないし

とか言つてれば後5Mほど、今までの思い出が走馬灯のように…あ、私は死なないか…

で、後目と鼻の先（顔が無いが…）、に傘、で、この傘をブチ破つて傘を差している人物が即死、と

が、予想は裏切られた

私の体が腕、胴体、足、腰、バラバラになりやがっ

意識が飛んだよ、飛びましたとも、だつてバラバラだぜ？恐らく私は霊力の集合体のような物が繋ぎとめているわけで…バラバラになれば霊力もバラバラに、意識だつて吹っ飛ぶさ

そして、気がつけば色々な物が置いてある場所だったんDA、…店

…か？

え？売られてるのか？私売られているのか？何円？

【甲冑：…そちらの言い値で】

それは普通買う人側の台詞だろう！何これ！？いらぬなら捨てるよ！組み立てて！

誰だ、こんな失礼な値段つけた奴は…！？

…とりあえず今、目の前で私を観察しているメガネの男が怪しい、つてかコイツで決定だわ…

「…いや、八千は行けるか…？そもそも売れるか…？これ…？やはり裏側に捨ててこようかな…」

八千？八千万？いや、恐らく8・000だろうな、何だその値段…
仮にも銀と金で出来ているんだぞ？

「それとも溶かして別のものを作ったほうが…」
恐ろしい事を考えてらっしゃる

この危機的状況を回避するには？

目の前の男を掴む

目の前の男を殴る

問答無用である

頭を掴んだ、かなりの力を込めて

「うわぁいつ！？甲冑が動いた！？」

とりあえず喋れないので右手にあるナイフで文字を書く

『騙して悪いが動けるんでな、販売は止めてもらおうか』

「わ、分かった、分かったから手を離してくれ！頭蓋骨が陥没したように痛い！」

とりあえず手を開放する…陥没したように痛い？もしかして経験済み…？なんて世界だ

「まさか…デユラハンを売りつけられるとは…人類初だろうね…」

む、デユラハンとは…中々言ってくれるじゃないか…

『悪いが、デユラハンなんていうのはただの人殺しを娯楽にする阿呆の鉄屑であり、私をそのような下劣な者と一緒にするというのは如何な物と思うぞ？』

「分かった、大体分かったから止めてくれ！それ以上店を傷つけないでくれ！」

柱がボロボロになっている、という事だけは言っておこうかッ！
で、そこで、だ、店の扉が開いたのは

「こーりん、邪魔するぞー」

中に入ってくるのはウェーブのかかった金髪ロング、白黒服、三角帽子

どう見ても魔女です、本当にありがとうございました

魔女裁判の必要があるな…全滅したと思っていたが…！まだ生きていたか…！まずは十字架に貼り付けて、その十字架を燃やすんだ、よし…

待てよ？先程の傘の一軒がある、この世界は少々常識外れなようだし…本当に魔法使うんじゃないか？

手出しをするのは止めておこうか…今では差別をなくすべきだ、魔女だって居たっていいよねっ！

「ん？その甲冑…見たこと無いな」

「ああ、これかい？悪いけどこれは非売品だよ」

いいぞ、魔女の物になったら何されるか分かった物じゃない…！

「ん？こーりんが売らないってことは…相当な品って事で間違いなさそうだぜ…」

あれ？若干話しずれてないか？

「い、いや！なんでもないから！本ツツ当になんでもないからね！」

「よっしゃ！貰っていくぜ！」

「だから売らないと…！」

「違うな、こーりん、私は買うと言ったんじゃない、『貰っていく』と言ったんだ！」

相当迷惑な客だな…！ここで私が動いてもいいが…それだと余計興味を持ちそうだな…

動かざること山の如し

「だ、駄目だ駄目だ！絶対駄目だ！」

「それじゃあ、私が納得できる理由を言えば考えない事も無いぜ」
不味いぞ、この場を切り抜けられるのか？

「こ、これは…！」

……

「僕の…」

…… 『僕の』？

「嫁だから…ッ！」

死んでしまえ、これなら魔女っ子さんに持ち帰られてイロイロ弄くられた方がまだ気分良かったわ

「……………」

気まずい空気が流れる、正直止めて欲しい

「…相談があるなら乗るぜ？」

「ありがとう…ただ、今は一人にさせてくれ…丁度いいくらいの長さの縄は何処にあったかな…」

吊る気だ！絶対吊る気だ！

「そうか…立ち直ることを祈ってるぜ、じゃあ、この甲冑は貰っていくぜ」

止めない上に結局貰ってくのか！…さてよ？計200Kgの私だぞ？魔女っ子とはいえ…女手一つじゃ無理じゃないかな…

というのは幻想だったようで、片手で引きずられた

…最近の女性は強いんですね…

「到着、到着つと…さて、風呂でも入るか」

銀色の甲冑

壁に放り投げた

…何この人？超怪力？今片手で軽く投げられたぞ！？

「
」
鼻歌交じりに自分の衣服を脱ぎ始める魔女っ子さん…そうか、私は
ただの甲冑だ、動かんぞ

ウホッ…いい裸体、役得役得

やべえ、こんな体でよかった…！まさか自分の前で躊躇いも無く服
を脱ぐ女性を見る日が来るとは…！

ああ、あの脱ぎ捨てられた衣服の匂いを嗅ぎたい…あ、顔が無いか
…！

ガツカリだよ畜生！

…少々取り乱した、三途の川に流してくれ

『あの甲冑…勢いで貰ったけど…どうするかなー？』

『薬物投与でもしてみるかな…？あ、的だ、的、それがいい、頑丈
そうだし』

奴が帰ってきいたら殺される

ど、どうするか…！？どうやって逃げましょうか！？窓！窓だ！窓
から逃げるんだ！

で、私が窓を開けて逃げ出そうとした瞬間

「ふ…いい湯だったぜ…」

速ッ！！カラスの行水にも程があるだろう！シャワー浴びて即行で
髪を洗う位の時間しか無かったよな！？

「え…？ちょ、何で動いてるんだ…？」

見つかってしまった

ざんねん！わたしのものがたりはここで終わってしまった！

ま、まだだ、まだ行ける！な、何か弁解の言葉を…！

先程パクって貰わせたナイフを使って、壁に文字を刻む

『私は幼女体系も好きだ、貧乳とか、希少価値だろ、ステータスだ

る

なにやってんだ私の右手エエエ！！

「幼女体：余計なお世話だぜっ！というかお前見ていたなっ！」

あれ！？身持ちが硬い！あんな性格だから意外と露出魔かと思っただけだ！純粋でしたっ！

そんなことを言っていると、目の前の魔女っ子さんは八角形のみよん……妙な物体を取り出し、こちらに向けてくる

……良くあるパターンだと、極太レーザーとかが来るわけだが、そんなの実際にはあり得ないは

ドグシユアツ！

無いと思いたかったぜ！畜生！

とりあえずこの極太レーザーをどうするか……！？こんなにデカイとデンド ビウムも吹き飛ばせるんじゃないか！？あ、植物のほうじや無いぞ

とりあえず落ち着けよ！裸体なんて人にいつかは見られるんだからっ！

とりあえず持ち物確認、右手にナイフ、左手に【銀】で出来た先が扇状になっている剣……

待てよ？銀……？いけるっぽく無いか？！どっちにしろ何もしなければ死ぬ！

私は、向かって飛んでくるレーザーを、剣で薙ぎ払った……その時！奇跡が起こった！

レーザーは一瞬凍りつくくと、砕け散る……右手は使っていないからなっ！

「あ……在り得ないんだぜ……マスタースパークが打ち消された……！？」そして、もう一つの異変、私は……

……

……

無自覚の内に、空中に留まっている魔力を吸収していた

おお？今なら喋れる気がするぞ……？

「おい、お前……！」

喋った！クラ が喋った！クラ が喋った！

いや、私ですけど

「白銀の鉄の塊で出来ている私が女性の魔法使いに遅れを取るはずが無」

い…ってあれ？喋れないぞ…まさか…魔力を使って喋るとか、そういう無駄な機能？

言い切れない名台詞ほど恥ずかしい物は無い

「…問答無用っ！バラバラに引き裂いてやるんだぜ！」

とりあえず服着ような、な、おじさん待ってるから、着替えシーン
間近で見させてもらっつから

…私は気高き騎士^{ナイト}であるっ！

01 (後書き)

私は気高き(重要、テストに出るぞ) 騎士であるっ！

…ええ、彼は気高きナイトですよ、ただ、ちょっと精神的にアレなだけで…

現状報告、とりあえず魔女っ子さんに服を着ると、アドバイスしたが、出て行けエ！と言われ、追い出された為着替えシーンは見れず…べ、別に悔しくないし！私は高貴な騎士だし！人間の裸体とか興味ないし？露出度高い甲冑のが興味あるし？っていうかーあんな幼女性系見ても喜べねえーしー

…と、右手が勝手に壁に書き殴ってた訳だ、やべえ、どうしよう、この壁切り取って持ち帰りたい
れれれ冷静になれ…とりあえずだな、魔女っ子さんが来る前にこの壁を何とかしないと…

まあ普通女性というのは着替えに時間を掛ける生き物だ…特にあの服なら…！三十分ぐらいは…！

「待たせたんだぜ！」
速エエよ！壁どうしようか！？

「…お前…一体何書いて…人の家に…」

まだ気づいてないか…！？今の内になんとか…

「何処が高貴な騎士だ！」

遅かった、速読か、感動的だな

しっかしなあ…どうしよう？私魔術とか知らないよ？右手で打ち消せるの？無理ですよ

「…お前、弾幕ごっこ…知ってるか？」

ダンマクゴツコ…？ダンマクゴ、という属性が分からない…ダンマクゴっ子…未知だな…

『悪いが知らないな』

右手のナイフで木に書き込む、っていうかよく見えるな…

「そうか…それじゃ…」

教えてくれるのか、なんと心優しい

「ずっと私のターンって事でOKだな！」

なにが OK だ

一方的な虐殺じゃねえか！等といっている場合ではない、星屑やら光線やらが飛んでくるのである

綺麗だが、当たれば即死確定だろう…いやいや…これがラスボスって奴か…

あ、ダンマク…弾幕か…ダンマクゴつ子、弾幕ごっこ、ね…
ごっこつてレベルじゃねえぞお！

その時だ、私の背中から複数の剣が飛んで行き、飛んでくる弾幕を切り落としたのは

「なっ…?! お前…私を騙したな！」

いやいや…不測の事態だつて…え？何これ？怖いんだけど

自己解釈開始…霊力で作成された剣

………あたいたら天才ね！

トンデモ結論が出たが、それ以外あり得ん…ははん、超展開？

相変わらず星屑やら光線が飛んでくるが、剣が切り落とす、自己防

衛自己防衛

………邪よこしまな考えが頭を横切った…

今なら正当防衛で事故を装ってイける…

何考えてんだ、とフロントサイズを十五倍ぐらいにして叫びたいで、今、私の前を縄が横切ったわけだが…理由は考えたくも無い！
魔女っ子さんに向かって進む縄を全力で応援する剣達…何コイツ等…
…何故だろう、なんとなく分かった気がする…これ…特殊能力って奴だろ？

恐らく…考えた事を霊力を使って勝手に実行するんだろうな…

何それ怖い

「ちよっ！？まっ…降参するから止めてくれ！」

「おーおー縄が食いつい取る、いい光景だ…」

「さ、散々だぜ…」

見事な腋晒し

く甲冑による初心者でも出来る脇晒しく

まず最初に標的を弱らせるか、昏睡させる。

6m縄の折り返しを手首にふた巻きしてから絞り縄を施し本結びで留める。

手首をに後頭部にあげさせ、縄尻を背におろし、乳房の下を通って胴体に巻きつける。

縄尻を手首からおろしてきた縄に引っ掛け、反転させてから、乳房の上を通って胴体にまきつける。

縄尻を結んで留め、完成。腋ががら空きになるぞ！

なにやってんだ…私は…

さて…どうしたものか…この魔女っ子は…

とりあえず縄を解いてやるか…？

自力では絶対解けないし…

しかし、私が近寄ると

「く、来るなっ！変態っ！クス野郎っ！」

否定できない…っ！

…じゃあ、放置しとくか…

本来ならここで襲つてもいいんだけどな、私甲冑だし、性欲の類はあるが、リボルバーは持つていない
…あの人形達はあつたよな？羅生門…
悔しいぜ…いや、悔しくなんて無いぜ！
「こんな所誰かに見られたら…一生太陽を見られないぜ…」
でしようね

パシャリッ！（未知の金属音）

え？何？！今奇妙な音と光があつたのだが！？え、ちょ、怖いんですけどお！！（彼にとつてカメラは未知である）

「…馬鹿な…射命丸だと…言うのか…？」

奇妙な音の先、奇妙な箱を持った黒いカラスのような翼が生えた少女…あの奇妙な箱が欲しい

「あやややや…これはこれは…どうぞごゆっくり…」

「…待て！とりあえずこの（その）縄を（奇妙な箱を）解いてくれっ！（私にくれっ！）」

魔女っ子さんはそう叫び、私の言葉は言葉にならなかったが、空中に文字という形で現れた
何これ、便利じゃない…

「いえいえ、邪魔するの何ですから」

『いいから、その奇妙な箱をこちらに渡すんDA！』

「ええ〜？カメラをですか…？嫌ですよ…壊しそっだし」

カメラ、カメラと申すか！その珍妙な箱は！童わいわによこしたもれっ！

（まさか…あいつ、本当はこんな事をしたかつたんじゃない…？まさか…最初の着替えの時は私が急に脱ぎだしたから、動くにも動けなくて…そして逃げる時は、的にする、と言ったから、で、最後の奴は…気まずくて動けなかった…？私は…！なんて間違いを…！）

いま、壮絶な勘違いをされた気がしたが関係ないね、私はね、カメラに夢中なんだ

ほらね？自然に体が（カメラを奪いに）動いちゃうんだ

「ちよっ！？襲い掛かってきましたよ！？今だ！フェイタルフレーム！」

バシャリッ！（先程とは明らかに違う音）

「あ…アレは伝説のカメラ…射影機！？」

うあわあああ！今霊力が吸い取られたような気がした！というか体が吹っ飛んだ！カメラ怖ええ！！

『よ、よくもこんなキチガイカメラを！』

「さて…今の内に戦略的撤退をさせていただきますかね」

次には何処かに消えるカメラウーマン…絶対にあのカメラを手に入れて見せるさ…！

「お、おい！甲冑！速く縄を解いてくれ！」

『別にいいが…随分信用するんだな、私の事を…』

「謝るから！謝るから速くしてくれなんだぜ！」

…ん？何かいい具合に事が運んでいるような…

『しかし…縄を解いたらどうするんだ？』

「攻撃目標は妖怪の山だ！射命丸 文、必ず私がこの手で滅ぼしてやる！」

しかし…この縄の解き方ワカンネ、あ、ナイフで切れればいいか…

『そついや…お前、名前は…？』

「魔理沙だぜ、で、あんたは？」

『僕かい？僕は富竹、フリーのカメラマンさ、あっはっはははははは…へえあ…』

「吹き飛ばすぜ？」

『ああ、名前か…？えつとな第一ドールが…アレだったから…名簿順で考えると…白銀星雲…さすがーゼンさんだ！俺達に出来ない

ネーミングを平然とやってのける！そこに痺れる憧れるウー！』

バカヤロウが…！マイケルとかディブとかそういう普通の名前が良

かつたぜ…ッ！

第一さあー水銀とか彗星とか蒼星とかさあ…まともな名前を考えられんかね？全く…

そんなこんなで縄が解き終わったんD A

「よし…私の名誉を取り返してくるぜ…」

『まさか…あのカメラを破壊するのか…？』

「もちろんだぜ！」

君の周りにもこういう友達がいるだろう？そしたらこうやって暴力では何も解決しない事を教えてあげるんD A

綺麗なサマーソルト

邪悪な裏拳

劣悪な腹パンチ

魔理沙の顎に直撃…

きゆうしよに あたった！

し、死んでないよな…？

と、とりあえずあのカメラを破壊させるわけには行かないし…（

彼はカメラがどのような機械なのか、そして射命丸がどのような使い方をするか知らない、つまり正当な判断である）

それに見られたからといって…消し飛ばすのは駄目だ…

とりあえず中に運ぼう…

その後、私は涙目の魔理沙に殴られ続けたが（全く痛くなかった、むしろ可愛いから抱きしめた、冷たいんだぜ！チルノか！といわれた…チルノって何？チルノチヨコ？それはチロルか…）

涙目の魔理沙が可愛い、とだけ言って置こうか

翌日

【文々。新聞 最新刊 甲冑は大変なものを盗んで行きました】

先日、私が魔法の森を散歩していた時の事だ、私は偶然とんでもな

い物を目にしてしまった

(縛られて叫んでいる魔理沙と甲冑…否、白銀星雲…の写真)
…お分かり頂けたらどうか、以後私はこの二人の関係について

あのカラスゼツてえ
魔理沙さん、キルるお許してください！

02 (後書き)

…あれ、おかしいな…普通に甲冑と魔理沙の戦闘シーンを書くはずが、よく分からない物に…あるえー？

03 (前書き)

自「ねえねえ今どんな気持ち？君より出オチクロちゃんのがモテてるけどどんな気持ち？」

白「止めなさい、死んだ人の話をするのは」

自「クロちゃんのフリーダム差がいいんだとよ？もっとハメ外せば？」

白「18禁美味しいです」

自「実は…クロちゃんは生きてるんだ…あの粉々に砕け散ったのは…変わり身さ」

白「マジかよ！今度あったら将棋やるか…」

自「そこはチエスだと思うんだ」

白「ん？ちえん？」

自「もういいよ、さっさと射命丸に殴りこみに行けよ」

突然ですが…只今非常に助けて欲しい、何故か分からないか？分かってくれ、察してくれ、頼むから…！

この目の前の人形遣いを何とかしてくださいよ

『話を聞いてくれると嬉しいんだが！止めて！人形とか止めて！怖いから！ホラー苦手だから！』

『汝の言葉は心に響かぬ、射突武器部隊、バイルバンカー目標を蜂の巣にしなさい』

『それもう、あれだよ、殺入兵器ですよ！イラクの人が見ると喜ぶかと！』

畜生…！まだ死にたくねえ！とりあえず右方向から向かってくる何十体もいる殺人兵器を何とかしなければ…！能力の活用性はまだ見つからないし！一体一体相手にしてたら切が無い！畜生！『心情を表現する程度の能力』って！どんだけ貧弱なの！？大体こういう時はチートっぽい能力がつくべきだろう！？えーつと…『世界の基準を設定する程度の能力』…とか、あ、何そのチート…マジキメエ…そ、そうだ！あのマスタースパーム？とか言うのだったら一掃できるはず！

『助けて！魔理沙せんせええーい！！』

『デメエは私を怒らせた』

駄目だよ畜生！足音を立てて進行してくる殺人ドール集団…！リアル呪いの人形めっ！！

『デュラハンなんて…私の崇高かつ絶対的な夢を侮辱しているわ…！』

畜生！またデュラハンって言われた！首が無いからか？頭が無いからか！？

『その上変態と来たもんだ、最早生かす価値など全く無いぜ、アリ

ス！消し飛ばしてしまえ！」

『マリザザアン！？オンドウルルラギツタンディエスカー！？』

「裏切った…？違うぜ…私は元よりお前の仲間では無いぜ…白銀星雲よお…」

『二人でツイスターゲームした仲じゃないか！？』

いやあ…楽しかったぜ…まあ、私は全く体が曲がらないから…な…察してくれ／＼／

「魔理沙…？」

「や、やって無いぜ！適当なこと言わないでくれるかな！白銀君！白を切るきか…！」

「…そんな妄想までして喜んでるの？人間のクズ、いや、まさに鉄クズね」

貴様に一つだけ言いたい…！鉄クズのカカシは使える子だぞ…！？

「で、そのうち…『魔理沙さんは俺の嫁』とか『魔理沙…！俺だ…！結婚してくれ…！』とか言い出すんでしよう？」

『悪い、俺の嫁は青眼の白龍ブルーアイズホワイトドラゴンだけだ、異論は認めん』

「な、なんだって…！」

いや、流石に嘘だけだな…そんなに真顔で驚かないでくれ、魔理沙、そして引かないでくれ、アリスさん

「さて、言いたい事はそれだけ…？安心して、死ぬまでしか痛みは続かないわ」

『せめて一瞬で殺してくれよ！』

こんの…人形遣い…！調子に乗りやがって…！腋晒しにしてやりてえ！

アリスといったか…！？あの人形達はこんな者を目指してるってのか？！正気じゃねえよ…！！

つてか、金髪率高ツ！しかもまたみょん…妙な服装してるし…なんか、青い服のうえから白い肩掛けって感じ？冬のおばあさんの服って感じ、うん分かりやすい

いや、見た目は人形みたいで超可愛いんだけどね…いや、この世界

美少女ばっかりだわ…

そろそろ、熟女とか欲しいんだが…まあ、贅沢は言わないさ

それよか…この大量に迫る人形をどうしたらいいか教えてくれッ…

！俺の中の天使よ…！

悪魔「騙して悪いが悪魔だ、諦めてもらおう」

畜生！詠唱を間違えたか！？

天使「落ち着きなさい、ヒーローは遅れてやってくる物ですよ」

おおおっ！来たな！天使よ！答えを導いてくれ！

悪魔「天使か…この間貸した三百円返せや！」

天使「はあ？なぜ私のような高貴な者が下衆以下の悪魔などに借り
を返さなければいけないのです？」

あれ？これ…逆じゃね？って違う違う！解決法を知りたいんだ！

悪魔「こういう時はな、自分に正直に行くべきだ、腋晒し、行け」

帰れ、帰ってベルゼバブかサタンの足でも舐めてるクズが

天使「はあ…そんな下衆な考えしか思い浮かばないとは…哀れな単

細胞…いいですか？こういう時はですね…」

うんうん、皆！天使様の嬉しい言葉がもらえるぞ！

天使「自分に正直に行くべきです、腋晒しを行いなさいっ！」

ミカエルの足の親指でもしやぶってる

駄目だ！所詮人間の心は一つ！天使も悪魔もねえ！

ヤバイ、ヤバイぞ！どうするよ！？だ、誰か助けてくれえっ！こん

な死に方嫌だあ！嫌だ、死にたくない、逝きたくない　　っ！

「待てい！」

あれ？これ生存フラグ…か？

「ほっ！？何時の間に！？」

「駄目だお前はっ！」

誰だ、じゃ無くて、駄目だ、なのね…

見上げれば、そこには、刺々しいフォルムに悪役って感じの黒い姿

…ば、馬鹿な…

「きみは ゆくえふめいになっていた クロちゃん じゃないか
！！」

「地獄からの使者、スペインダーマツ！（てってれ〜てれてん
てれんてれ〜 アーッ！）」

駄目だこいつ…早く何とかしないと…スペインダーマン？何そのス
ペインとインベンダーが混ざったような名前…

「シロちゃん、今助けるぞ！とうおっ！」

ガシャツと、綺麗に着地したクロちゃん…だが粉碎…

空気が凍結しやがった…！

「……………死になさい！甲冑！」

『まだだ、まだ死ねんよ！』

「無視すんなやゴルアアアア！」

まだ息があつたクロちゃんが、何処かの第三位ヨロシクのタツクル
をアリスに

死んだら…あれ…

「大丈夫かシロちゃん…何故俺が喋れるかだと？修行だ！」

聞いていない、聞く気が無い

『何故ノコノコと…少なくとも私の中ではお前はクレイジーな大量
殺人犯だぜ？』

「アリスーっ！アリスーっ！……………白銀星雲っ！アリス…息してねえ
よ！」

泣きそうな顔でこちらに訴えかけてくる魔理沙、その顔は何時もの
明るい顔とは対極に位置し、ギャップが萌える…

違う、違うからな、私は高貴な騎士だよ

『よっしゃ、私に心臓マツサージは任せろ、魔理沙は人工呼吸だ』

「お前に頼った私が馬鹿だったぜ！」

ご尤もごもつてもで

「む、俺に任せるといい、直してしんぜよう…」
治してな、

「ところでお前……何故、俺を助けた……？」
「簡単な事さ、実は俺……夜になるとな、教会の人間を殺しまわって
たんだ」

「……何のために？」

「お子様達を守るためさ、だって……あいつ等吸血鬼だろ？教会の人間は……危険じゃないか」
む、一理あるな……で、今、クロちゃんは、アリスの右手を握っている……羨ましいよお……

「でも親も殺しただろう？」

「当たり前だ、アイツ等……あの子供を大事にしているようで、教会に売り渡そうとしてたんだぜ？全く……」

そーだったのかー……信じられないが……実は、私達のような甲冑は嘘はつかない……だから本当なのだろう

「戻ーれえー……戻ーれえー……元に……戻オオーれエエー！」

絶対に死なない老人ホームかつ！

………なんてのがあつたらよかつたなあー！！クロちゃん！帰ってきてえー！

「止まれ！止まるんだ！まず、何故私が襲われているのか教えてくれ！」

「まさか……そんな事分かってないの……？あり得ないわ、論外ね……」
アリスが心底呆れた、という表情で此方を見てくる、やべえ、無茶苦茶視線が痛い

だがそれがいい

癖になりそう……

「コレよー！コレ、この写真よー！」

そういつてアリスは異次元からでも取り出したのか、ガセネタで有名な某新聞を取り出す…

『アリスさぁーん！（時計塔3のハンマー男っぽく）私の黒歴史掘り返さないでー！ホリケンー！』

だれ…？ホリケンって…ああ、最早ウノレトラマンとしか言いようが無い仮面ライダーになった人が…

『まさか…魔理沙を泣かせた、とか、そういう理由か…？』

その文字を読んで、アリスは相変わらず冷徹な眼を此方に向けながら、こう答えた

「惜しいけど違うわ、私はね…あんたが…」

……………ゴクリ

「肉体的な攻撃で魔理沙を泣かせた事に怒ってるのよ！」

パーフェクトフリーズ

空気凍結：効果、相手の思考回路は凍る

はい？

「あんたねえ、全ツ然分かってないのよ！魔理沙はねえ！魔理沙はねえ！精神的攻撃で泣かせてこそ輝くのよ！？普段明るい奴ほど強がっているから泣かせたときの顔の可愛さと支配した、という達成感が大きいなのよ？！それなのにあんたは肉体攻撃なんていう原人でも出来そうな事で魔理沙を泣かせたのよ！？貴重な魔理沙の泣k（以下略）」

なんというマシンガントーク、

ざんねん！かのじよたちの ゆうじんかんけいは ここで おわつてしまった！

『まあ、落ち着けよ、アリスさぁーん！（時計t（ry）（縛られた魔理沙も新鮮でいいだろう？』

そして、この文字を読んだアリスは…少し考えるような顔をして、こう答えた

「ま、まあ…確かに…新鮮ではあったけども…」

「今だ、一気に畳み掛ける！」

『今度の休みの日、縛り方教えてあげよう』

「是非お願いするわ」

即答でした、決断はつや！この世界の人は皆、速（早）いな！

で、気づくんだ、そこで、右側からあふれ出すどす黒い魔力とどす

黒い感情…知っている、確か、あの感情は…【怒り】だ

「お〜ま〜え〜ら〜なあ…私を何だと思ってるんだぜ…？」

『アリスさん！私はこんな怖い敵を作りたくない！はやくあやまつてー！』

「い、嫌よ！何で私が謝るのよ！？在り得ないでしょう、科学的に考えて」

どこら辺が科学的なんだ！

『ええい！私だけでも謝るぞ！Ich war schlecht

！』

ドイツ語で

だが…

「今まで成功した試しの無い新しいマスタースパークが今なら撃てる気がするぜ…」

時既に時間切れ

「邪砲『実りやすいファイナルダブルマスタースパーク』！」

『ゲェー！明らかに全ての名前を混ぜた技だあー！』

二本の細いレーザーが発射される、私は、騎士道精神に従ってアリスの前に立って、抱きしめる、無論守るためであって、コレを言い訳に抱きしめたかった訳じゃあない

その次の瞬間、細いレーザーを導体にし、先程見たマスタースパークよりも強力なマスタースパークが発射され、回転し、一面を薙ぎ払う、ちよ、じよ、冗談じゃ…

「おー…本当に撃てたぜ…凄い体が軽いんだぜ…！」
声が聞こえた、魔理沙か

そして、煙が段々晴れてくる、そして見えたのは…

満足そうな笑みを浮かべた魔理沙、で、私は正直驚いたよ、無傷なんだぜ？私…

ははん、そういうことか…魔の者の技は効かないってか？いや、恐らく魔法だけだな…

「…おい、魔理沙…」

「!？」

消し飛ばしたと思っていた魔理沙が此方を驚いた顔で見てる

「私の見た地獄はこんな物じゃあない…」

号令の一次的に喋れるタイムだけ、実は昨日の夜…スペルカード作ってみたんだが、喋れないから使えなかったんだ…行くぜ!

「即死『誠死ね!!』!」

次の瞬間、何も無い空間から黒い『誠死ね!!』『誠氏ね!!』『誠タヒね!!』『誠は死ぬべきである』等の文字が高速で飛んでいく、

「魔理沙よお…キレちまったぜ…生まれて初めてなあっ!!」

「逆ギレっていうんだぜ!？うわっ!危なっ!!」

避けられた弾幕が、後ろの木に当たる、すると…

木は腐り落ちた

「…じよ、冗談じゃないんだぜ…!」

「魔理沙…!さっきなんて言った…!？」

「そ、そういうのを逆ギレって言うんだぜ!？」

「逆ギレのがつえーんだよ!」

言いたかった、コレが言いたかっただけ、あの軍人…今、何処で何やってるかな…この空の続く場所にいるかな…

ひたすら誠死ね、の弾幕を張り続ける私、泣きながら避ける魔理沙、…可愛いなあ…もう少し虐めようかな…

ここで一番上の文に戻るとは誰も知らなかった…

無限ループって怖くね!？

03 (後書き)

ハンマー男は好きだったなあ… テンションの高さ的な意味で、後は硫酸男の『どうだあー！？硫酸風呂の湯加減はー！？』で、最高にエグいシーンなのに大笑いしたのはいい思い出
クロツクタワー3は、別物と考えれば楽しめるゲーム

04 (前書き)

白「私には…まだ分からない…何が良くて…何が悪い事なのか…」

自「ホースオルフェノク帰れ」

黒「シロちゃん…お前死にたいんだってなあ！」

自「とりあえずお前はまだ冥界に留まってる」

白「クロちゃんじゃないか！」

黒「よお、憧れられたなら出るしかねえな…」

自「本編へはださねえぞ」

黒「ばんなそかなっ!？」

白「安心しろ、しばらくしたら出れるさ」

黒「ふふん、別にいいぜ？俺はみよんみよんと楽しくやってるから」

自（……なんで…こつ、マトモな性格の人が書けないかなあ…）

私は…あの後結局…魔理沙と同居する事になった…WRYYYYY
YYYYY!!

理由説明

?ガードマン(必要なくね?)

?寝無いから夜間警備(必要なくね?)

?食費ゼロ!エコだね!

?部屋のイメージチェンジにどうぞ

?ナンパ時 「悪いけど、私、甲冑意外愛せないの」 撃退セリフ

?食事時 「悪いけど、私、甲冑がガードマンなの、それを踏まえ
た上で、金を払えと言うの?」 犯罪です

?借金時 「悪いけど、この甲冑でお支払い願うわ、5億ほどの価
値があると思うけど?」 意味不明

?腋巫女時 「霊夢! 落^{れいむ}ち着いてくれなんだぜ! こ、この甲冑あげ
るk…ギアアアアア…!!」 怖くて立ち向かえねえ…

?バカ

…よし!

「で、今日の予定だがー、先日腋巫女宅で寶銭箱の中を漁る、とい
う作戦を実行したのだが…惜しくも敗北となつたわけだ」

あの巫女…強すぎる、パワーバランスを崩しかねん…大きすぎる、
修正が必要だ…

あ、胸は余り無かったです

「理由は単純、私達にコンビネーションが足りなかったからだぜ」
確かに…戦つてさえないけど…

「で、一つランクを落して、今日は紅魔館^{こうまかん}の大図書館の魔道書を盗
みたいと思うんだぜ!」

おおーそーなのかー…何処? それ?

「あそこには紫もやし、一週間引きこもり、動かない大図書館、などとの数々の異名を持つ一週間少女事、魔法使いパチュリーがいるんだぜ」

うー パチュリー！

… ナニカサレタヨウダ

「で、あいつは喘息持ちだから、私が全速力で逃げれば問題無し、なので、無視だぜ」

話題に出さなくてよかったんじゃないかな？かな？自信満々に言うけどさあ！

「問題は門番の中国とメイド長だぜ…中国はまだしも…メイド長は不味い…」

『メイド長ってそんなにヤバイのか…？』

魔理沙の顔に若干影が差したのを見ると、相当ヤバイな…

「ああ、思い出すだけでも恐ろしいぜ…捕まっただと思っただら一日中吸血鬼の玩具だなんて…ああ…あああああ！」

相当なトラウマを植えつけられているようだ

『落ち着け、落ち着くんだ魔理沙！素数を数えるんだ！』

「1・3・5・7・9…」

『魔理沙、それ素数ちゃう、奇数や』

「ふう…落ち着いたぜ」

凄えよ、アンタ

『で、そのメイド長がどうしたって？』

「白銀にはメイド長を引き止めて欲しいんだぜ」

なるほどな…どんな恐ろしい者が知らないが…

白銀の塊である私が布装備であるメイドに劣るはずが無いっ！

『メイド長の特徴は…？』

「PAD常時装備、時間を止める、コレくらいだぜ」

『DIIOOOOOOO！』

「関係ないぜ」

PAD常時装備… PAD長と呼ばせていたかどうか…

「そうと決まれば早速出発だぜ！作戦としては、まず最初に門番の中国をチヨチヨイと片付けてそのまま進行してくれななだぜ、私にその間に図書館に侵入して魔道書をこっそり頂いてくるから」

『了解だ、同じ失敗は繰り返さない…！』

「あ、そうそう、メイド長が来なかったらPAD長ー！って叫ぶんだぜ？」

『OK、把握した』

投下まで5秒前：

「Are you ready?」

魔理沙が最終確認をしてくる、ふっ…当たり前だ…目標は紅くれない 美鈴みすず

…ちやう！紅ホン 美鈴メイリンや！

「うん！」

先程マスタースパークで会話パワーは補充してきた、これでスペルカードも使えるぜ…！

魔力はパワーだぜ！

私は、一度魔理沙の顔を見てから、ぶら下がっていた箒から手を離す

「イヤッツホオオオオオオウ！」

そして空中で一回転、そのまま足を伸ばし…

下で前しか見ていない馬鹿な門番に…

上空2・000M+200Kgの全体重を乗つけた踵落し

「は？ちよ、ま、死ぬっ！（ガッ！）」

直撃

「フツ…愚か者め…出オチには誰も勝れんよ…」

…そういえば、魔理沙から張つとけ、という紙があったっけ…どれどれ…？

『お休みなさい、咲夜さくやさん、夢の旅に出てきます、それと、PADだってバレてますよ』

まさ に 外 道

まあいいか…すまない、見知らぬチャイナドレスで赤髪の軍隊帽子に龍の文字の中国さんよ…

ウホツ…いい美脚…いかん、急がなくては…

で、次はメイド長だったよな…？

………
来ない、な…叫ぶか…

「おい！PAD長」

シャシャシャシャシャシャシャ（ry

一瞬で周りがナイフだらけだーそーなのかー

残念だけどきかないのかー

「お嬢さん、悪いね、効かないんですよ…！なんせ、幻想郷^{げんそうきょう}一硬い

奴と言えば私ですからね…！」

ちなみに幻想郷って名前は一昨日教えてもらった、…遅くね？

「そうですね、しかし、先程の行動を見るに、あなたは罔、別に戦

闘などしなくても…」

「皆ー！皆ー！PAD長が逃げるよおー！完璧なんていつてるPAD長が私に怯えて逃げるよおー！！！」

…葬式場は海辺がいいなあー！！

「KA KU GO HA DE K I T E I M A S U

NE…？」

うわああああ！！顔笑ってるけど目が笑ってない！空鍋状態！！

「ささささつさと…片付けるぜ！真紅「真つ赤な誓い」！」

直後、真つ赤な誓い…という赤い弾幕が無数に放たれ、PAD長に向かう

通った後には火が残る、火炎属性です、主にハイテンションを司っているのさ！

全く、便利な能力だぜ…

しっかし…全くびつくりするほどPADだよな…PAD長…
ハハハ傑作だな」

「そうですか、笑えますか、まだ笑える余裕がありますか、なるほど」

え？ああ！？途中から文字になってやがる！！なんて不便な能力だ！！

しっかし…一向に当たらないな…

ちなみに、私の能力はスペルカード意外に攻撃方法が格闘しかない、という…しかも話に寄れば相手は時間を止めるそうじゃないか、格闘などあたりもしない…！

時間との勝負か…！！

「仕方が無い！次行かせて貰おう！灼熱『松岡修造』！」

「駄目駄目！諦めちゃ！（ry）、世間は冷たいよなあ…」「俺について来い！」熱い弾幕が数々流れていく、不釣合いだツ…！！クールな私には不釣合いだツ…！！

しっかし…一向に当たらん…

スペルカード、手持ちは後三枚…仕方が無い、こいつを使うか…

「姉符『震度2で崩れる我が家』！！」

実はコレ、応用で、相手に私にかかる特殊効果を移す、という物で…コレで、相手は心理的に非常に不安定になり、姉齒建築になる…で、次に脅すための弾幕を使えばいいわけだ、

「恐怖『迫り来るマスタースパーク』！」

ラーニングさせて頂いた…っ！！…まあ、コレは靈力の塊がマスタースパークと完璧に同じ姿で迫り来る、という靈力の応用だ、で、コレは少しだけ追尾するのだが…

心理状況が不安定ならば、何時までも追いかけてくる、という妄想が生まれる訳だが、ここで靈力の本領を發揮、このマスタースパークは消えるが、このマスタースパークを一度でも見た物は、追いかけてくる、など思い込むと、永遠と追いかけてくるのである、無論映像だけだが…

何度も言うが、心理状況が危ない奴じゃないと、すぐに気がついて無効化されるが…

「くっ！？これはあの白黒魔法使いの物っ？！とりあえず避けなくては…っ！」

「こうかは ばつぐんだ ！！」

『それじゃあ本は持って行くぜ！』

『持ってかないでーガハッ！…ひ、酷いわ、魔理沙、まさかお茶の中に砂鉄混ぜるなんて…』

えげつねえ！！え？ちょ？喘息持ちの子にそんな事したの！？怖いよ！！

『また来るぜ！』

窓を割って、魔理沙が出てくる…

「し、死人は出してないよな…？」

「多分大丈夫だぜ！磁石で引っ張り出せば」

間違ったら頸動脈切れるからね！？それ！？

私は決心した…：今度謝ろう、と、メイド長？ああ、木の陰に隠れてガクブルしてたよ、あと五分ぐらいで解けるけど…

「いやー大勝利だったぜ…しかし…白金の重さで一冊しか持って来れなかったんだぜ…」

『面目ない…』

…そういつて魔理沙が取り出すのは一冊の古書、これが魔道書かー

「どれどれ…拝見させていただきますかねー」

そんな事言いながらパラパラとページを捲る魔理沙…、どんどん顔が苦笑いになっていく

『どうした？まさかあれか？ブックカバーを偽造した同人誌だったとか？』

「いや、それは五冊ほどしかなかったぜ、今まで…」
あつた事に驚きだよ！

『じゃあ、どうしたのさ？読めないとか？』

「いやな…読めるんだけどな…コイツは私には向いてないというか…何というか…」

『向いてない?』

「ああ、私の魔法って、ほら、こう、派手な物が飛び交うだろう? だけどこの魔道書に書いてあるのは…所謂ゴーレムって奴なんだぜ…」

ゴーレムか…そういえば、岩男のゴーちゃん、元気かな…彼はあのお子様達にとって父親のような物だったから…ってあれ? 結構回りに妖怪居たなあ! おい!

『じゃあアリスにでもあげればいいんじゃないか?』

「いやー、アリスは自分で作った人形しか使わないから無意味だぜ」
なるほど…それなら…

『…ブックオフに売りに行こうか』

「待ってくれ、そこは私にくれ、とか言う場面だぜ」
えー? だって面倒だしー?

『黙ってブックオフ行く! むしろブックオフのほうがいい魔道書売ってるってー!』

「それは無いと思うぜ…」

04 (後書き)

白金星雲君は、能力を主体にした本当の【弹幕】、霊力を主体にした攻撃を使います、その上、生半可な攻撃は通用しないという…泥仕合一直線なキャラです

05 (前書き)

自「お前さ…スペルカードの元ネタ、何処で知った…？」

白「頭の中に思いつくままに…な？」

自「……」

白「ところで……な？」

知っているだろうか、吸血鬼、という物を

奴等は人の血を吸って生き続けるわけだが…日光に弱かったり、銀に弱かったりする、一部の奴はニンニクにも弱いらしい……実に弱点が多い妖怪だ

なんせ、私は弱点が無い、あるとすれば自由にスペルカード発言ができない程度だ…

しかしまあ…私は今の所防御のみがチートなわけで…バランスが取れてないんだ、そのせいで泥仕合の続くこと…この間のメイド長だつて…結局幻覚で怯えさせるだけだし…

仕方が無いんだよね、私の弾幕は当たらないし、肉弾戦も時を止められちゃあ無理だ

しかも…肉弾戦ができればまだいいが、空を飛んだりすると無理な訳で……しかも私、スペルカード意外に遠距離攻撃が無いという

…

だがしかし！まだ私にも救いがあった！大図書館から盗んできた『？でもできるゴーレム魔道書』をブックオフに売り飛ばした所、¥8・000という破格の値段で売れたんだ、で、その代わりに二つの本を買って来たんだ、『あなたの霊力を有効活用できる！超カンタン霊力操作法』…騙されて無いよな？と、『あなたも明日から魔法使い！超カンタン魔力操作法』……同じ作者だこれ！！どちらも4・000つて所も考えて、本当に同じ作者だよな、これ…騙されてたら笑えん…

まあ…魔力を自分で作れば…自分の中のサイクルで喋れるようになるしな…

……意思表示の能力…ねえ……本当に役に立たないな…

で、最初のページ目…

『あなたは、もしかして霊力を有効的に使えなくて困っているんじ

やないだろうか、私にもそのような時期があった、しかし、その時にこのような呪文を使えば、絶対に使えるようになる』

二ページ目

『なぜベストを尽くさないのか』
騙された

騙されたと思っていたが、あれは本物だった…！一週間たった今、私は靈力を操れるようになって…！このまま修行すれば怨念の塊とか飛ばせるのか！？

…テンションが上がってしまった…

『ルーミア先生頼みますっ！』

「おうーいつでもいいぞー」

金髪に黒い服に赤いリボン（お札らしい）の妖怪、

妖怪そーなのかー、ルーミア先生

彼女には靈力で相手の影から作り出す、相手の分身の能力を確かめてもらっている、理由は単純

他の妖怪に比べ、断然話を理解してくれる（というか聞いてない？）

し、体術が素晴らしい、この二点だ

まず最初にルーミア先生の影から分身を作り出す、この間、5秒…

これを縮めるのが一つ目の課題だな…

『遠慮せずに言っ下さーい、別に死んでもいいんで』

「そーなのかー」

…問題その二、相手の性格を完全にコピーしてしまう事…これは私がコントロールしきれしていないのだ、別に問題じゃないように見えるが、これによって、メイド長二人に増やしてみる、逆効果だ

「なーなー、このリボン取ってくれないかー？」

「いいぞー」

『駄目だろっ…！』

「そーなのかー」

正直疲れる

『早くやって下さいよ…』

「わはー」

あ、多少イラついてきた

「じゃー行くぞー？」

「おうー来いー」

本格的に戦闘開始だ、細かい動作の瞬き、呼吸、会話などは人形あぢらの独断だが、体を動かすなどの大まかな部分は此方の操作だ、せめて会話も操作できるようにしないと…

ホシモノ先生がまず最初に人形ニゼモノの右手に掴みかかる、人形にその攻撃を避けさせず、代わりに先生の溝に膝蹴りを入れるように操作する、此方は痛みを感じないからなあー…このような戦法が取れる訳で…

食いちぎられる偽物の右手、それでも尚蹴り続ける人形…といつても見た目は完璧なので…

超グロい…何回見ても幼い女の子同士が殺しあう姿は見れるものじゃない…

右手を食いちぎった先生がお返しに手を返し、人形の顔に当てる、するとどうだろう、人形の首は骨がはずれ、吹き飛ぶ…グロツ！！が、どうせ痛みは感じないので、残りの体力を振り絞り、先生に…
フランケンシュタイナー

…結局先生に結構なダメージは与えられたが…首が吹き飛んだ人形は結局動かなくなった、まあ、一体でこれだけできりゃあ十分か…
…え？人形？先生が美味しく頂きましたよ？

『で…先生、評価をお願いします』

「んーもう少し肉に酸味を持たせるといいと思うぞー」

『ご貴重な意見ありがとうございます』

「わはー」

よっしゃ、家に帰って早速調整を行うか…ついでに晩飯の作成も…

「白銀、向こう側にある本取ってくれ」

『だが断る』

魔理沙の願望を一瞬で断るぜ

『あ、そうだそうだ、人形に取りに行かせるか…』
あたいったら天才なんだから!!

「ちよ、人の人形勝手に作るのはどうかと思うぜ」

無視無視、で、人形作成終了、この間、僅か0.5秒である
おお速い速い

『人形、向こうの本とって来い』

「だが断るぜ!」

結局これだよ(笑)

畜生…性格が…反映されているから…

『畜生!もういい!人形に頼った私が馬鹿だったさ』

そして更に三週間の時が流れた…!なんとというサクサク!まあ、どちらにしろ先生に戦い挑んで、調節して、完成して、魔法の修行を始めて二週間、って所か…:まあ、それなりのスペースで進んでるさ…:

魔理沙は派手で、見た目どおりの威力の魔法

パチエリーは、魔理沙の話によれば応用の利く属性魔法

アリスは…リアル呪い人形

なら…私は?

答えは 無、空間、風、氷、土、幻、月、炎、水、時、花、雷、光
の私が見える属性を全てかき集めた美しい魔法(笑)十三人の機関
は関係ないぜ!!

しかも霊力で作成した人形付き

三段撃ちを参考にさせてもらったスペルカードもある、ノブナガは
偉大だな、第一部隊が撃つ、そしてその間に詠唱していた第二部隊
が撃ち、第三部隊はその間瞑想し、魔力を高める、完璧じゃないか
つ…!!

霊力人形は完璧になった、30体位なら余裕だし、何より簡単なA
Iは作れる、一々操作する必要が無いから制御も楽だし

…という事で…紅魔館に殴りこみに行くよ！
理由？簡単さ、メイド長と決着を付けるのさ……
あ、私はここに永住するぞ？

テスト1、門番、紅美鈴、否、中国

「…！この間の甲冑…！」

出オチ…！が、構えて此方を睨んでくる、おお怖い怖い
私が最初にとつた行動は、足元に剣を突き立てる事、ちなみに先が
扇状に開いてる剣は背中に背負っている、魔力、霊力、どちらに触
れても絶対に打ち消すから…ちなみに随分前の攻撃が防げたのは、
剣が偶然背中にあつたからであり、この体は物理防御にしか強くない
で、突き立てた地面に、剣を中心に血の様な赤い文字で所謂魔方阵
が展開する

これは、身体強化の魔法だ、攻撃は避けなければ意味が無いからな…
「早速だが…！この館の主に合わせて貰おうじゃないかっ！」

「それは無理な話、という物です」
「ですよねー」

まずは目晦ましに弾幕を張る、ちなみに、魔力の永久機関は完成し
たぜ

「目障『動画に住み着く悪魔』！」

そういえば、『時報UZEEREE』『時報おおおおお』等の
弾幕が流れていく、で地面に当たるたびに発光、相手は目が潰れる！

「今だ！一瞬で蹴りをつけさせてもらおう！瞬符『Larxene
- 非情の妖姫 -』！」

中国を囲むように私の影人形が現れる、そして、雷で作られた剣を
前に出し、一直線に突っ込む、何処かの13人の黒いフード被った
集団の金髪の某ゴキブリ姉さんとは関係ないよ！！

「くっ！？」

まだ目が見えない中国は上に逃げる、なるほど…直感？

しかし、まだ私のバトルフェイズは終了してないぜ！

一つの影人形が、上に飛び上がった中国の背中を蹴り飛ばし、その先に居た影人形が回し蹴りを頭部に、…しかし…全部ガードされていた、気を使ったのか…？やはり近距離では強いなあ…

即行で畳み掛けられ気の動きも間に合わないと思っていたけど…間に合うのかっ！

とりあえず、最初のは奇襲過ぎたか…甘く見ていた…！

「流石門番…無駄に固いな…」

「褒め言葉、として受け取っておきましょう」

そっぴいなながら此方に走ってくる、なるほど、本体を潰そうという訳か…潰れないぞ？そう簡単には…

「パターン変更！剣の舞！」

説明しよう、剣の舞とは一本の剣を30体の影人形が使いまわし、予測不能のランダムで攻撃する方法である

影人形を三十体に増やし、動きを変える、その動きはまるで踊っているよう、しかし…踊っているのは全部私だがなっ！！今度魔理沙でやって見るか？和むかも

中国こと紅美鈴は動けずに防御に徹する、まあ、多対一ってのは人間が最も不得意とする戦いだしな（自己完結論）

「よっしゃー！中国は撃破したも同然っ！パターン変更！自爆！」

「中国って呼ぶなーっ！って…自」

言い切られる前に影人形全部爆破、爆破だよ爆破、

「美鈴、爆破はいいぞ」

何処かの学校の怖い話のナンチャラ先輩の真似をしながら言うスポーツはいいぞ（グツ）

ちなみに自爆音は無音、サイレンサー付き、って事よ、バレたら面倒だし？

「ふうー終わったか…！次だ次！出てこいや！PAD長ー！！」

次の瞬間に回りにナイフ、一面ナイフ、…あれ？前と何かが違う

…多少の魔力を感じるっていうか…いや…まさか…！！

05 (後書き)

図々しいのですが、何か、ご存知の弾幕がありましたら感想に書いてください、白銀星雲が喜んで使います

06 (前書き)

キャラ崩壊注意

前回までの東方甲冑劇は

「白銀星雲、確かそれが私の名前」

記憶を無くした少年、白銀星雲、彼が倒れていた所を助けた『自称』魔法使いの少女

霧雨魔理沙の助言により、悪魔の住む館、紅魔館へと足を運ぶ、しかし、そんな彼の前を一人が立ち塞ぐ

「貴方は紅魔館の主権領域を侵害しています、早急に立ち去ってください、さもなければ」

「実力で排除することになります」

迎え撃って来た彼女をギリギリの所で撃退する白銀星雲

しかし、彼の前に新たな敵が立ちふさがった

「待ちなさい、色々突っ込むべき所がある様な気がするのだけ」
「ど」

「気のせいだけ、無理すんなだけ」

「口調、うつってるわよ」

「…なん…だと…？」

「…な、なんだってー!?!」

「心情で表現して、さらに口で言う必要性はあったのかしら？」

「…ノリ悪いなあ…」

なんて言っている場合じゃあない、次の瞬間には目の前に複数のナイフが…!

「当たらなければ、どうということはない!」

次には私はメイド長の後ろに回っていた

「…消えた？」

消えた、で表現はあっているな、私は私を探しているメイド長の後ろで、空間を捻じ曲げて引っ張り出して一つの輪に複数の棘が縦に

並んでおり、一つだけ棘が長くなっている奇妙な銃を両手に持ち、メイド長に乱射する

「後ろっ！」

メイド長はそう言い、ナイフを投げて弾を全て打ち落とす：「はあ？人間業じゃないだろ！！つてかナイフ何本もってるんだ！？四次元ポケットか！？」

ここで、私の使った二枚のスペルカードの説明をしようじゃないか

一枚目 瞬符『Larxene - 非情の妖姫 - 』

これは影人形の動作の複雑化 + 上限上昇のスペルカード、まだ試験段階だけどな、ちなみに雷を帯びた剣とか、直接相手に雷を落したりとかの雷属性の魔法に長けているフォームへとも同時に変わる、ちなみに一時期、非情が非常になっていたが：幻想だ、忘れる

二枚目 射符『Xigbar - 魔弾の射手 - 』

これは空間を操作する魔法 + 魔銃『シャープシューター』を両手に召喚するスペルカード、無論試験段階、これではシャープシューターの維持と、空間を操作するのに魔力 + 魔力の回復に霊力を使っているため、影人形の作成や、同時に他の魔法は使えない、しかし：その見返りとして空間を操作できるからな：まあ、効果は今から使うから、見ていてくれ

「なるほど：：テレポート、という感じですか：：」

「まあ、そんな感じだな：：しかし：：時を操るって：：本当にチートですよね、ハイ」

メイド長は次にもナイフを投げつけてくる、私はもう一度空間を移動して避ける、ちなみに、この移動方法は、空間をこじ開けて入り口を作り、別の場所の出口を作り、その中を距離を無視して通っている、という物だ

…で、このメイド長の撃破方法…

先程の門番は妖怪、しかし、このメイド長はチートっぽい能力は持っているとしても、所詮人間

ならば…人間の限界を超える動きをすればいいじゃない（キリッ）
まず最初に人間は目の前の現象が理解できなければ多少思考回路が麻痺する、そして次に高速で動き回る物にも混乱する、ならば…

まず最初に地面に足をつけたまま、メイド長の前に重力を無視した逆さの姿で現れる、メイド長は、私の空間を移動する方法が、『点から点への移動』と考えていたので、混乱し始める、私の本当の移動方法は『入り口から出口への動き』だ

「なっ…!？」

ちなみに、この状態だと、重力に従って落ちるんじゃないか、と思われるが違う、地面に足だけ残してあるので、今の状態は、地面に立っているのと同じなのだ、よって重力にしたがって、落ちないよく分からない？細けえこたあいいんだよ!!

更に次は、腕だけを移動させて、乱射、メイド長はこの奇怪な動きについて来れず、防御で手一杯だ、で…今の内に…手をこっそり首の後ろに近づけて…

意識を刈るっ!

「貰った!この勝負貰った!白銀の塊の私が血と肉でできている人間に劣るはずが無いっ!!」

「うっ…!?!?…あ…」

メイド長撃破!

完全撃破!!

テスト3 館の主

初めて紅魔館の中に入った…

中は思ったより綺麗だな（真っ赤で）

目に悪いっ!!

…しかし…何処に館の主はいるんだ…？

折角だから俺は赤い扉を選ぶぜ！！

「あら…速かったわね、いらっしやい、歓迎す」

………あれ？何処かで見たことのある様な…？

…薄い青色の髪、以上に成長した犬歯、突き出た翼、足を組んで頬に拳を立てる座り方…

「何であんた（貴様）がここに入るんの（だよ）！？」「

どう見てもルミリア・スカーレットです、本当にありがとうございますございました

驚きだよ！

「なるほどねえ…フランに壊される前にスキマに落されたのね」

「スキマというのは理解できないが、恐らくそれで合っているだろう」

若干興味があるような感じでレミイが聞いて来る、そして先程撃破したはずのメイド長が紅茶を運んでくる、復活速いって…

どうぞ、なんて言っ出て出してくるが、目が怖い、今にも殺されそう

「咲夜、駄目じゃない、お客様なのよ？」

「すみませんお嬢様、それでも『人間』ですのよ」

人間、の部分を強調して此方を向いて言って来る、正直悪かったと思っっている

「…貴方、相当咲夜に嫌われてるわね」

「ああ、確かにその件は私が悪いだろう、だが私は謝ら

ない！！」

気の毒そうな表情のレミイにそう言ったら、呆れた表情に変わった、え？何？何か間違ったか！？

「それにしてもあれだな…」

「何？どうしたのよ？」

「いや…随分カリスマ気取りが上手くなったなあ…と」

「何を言ってるやら…私は根っからのカリスマよ？」

「カリスマってのは、カリスマになろうとした瞬間に失格なのよね」
「黙りなさい、白黒反転弁護士」

…む、随分カリスマの壁が硬くなってやがる、随分前はカリスマ要素を否定されれば崩れたのに…！
無駄に500年生きてないってか…

「しかし…随分前は恐怖系の話を聞いたか、本を読んだ晩は私を見る度に涙目になっていたレミイが…強くなった物だなあ…嬉しいが何処か寂しい、これが親の感情って奴か」

「な、何を言ってるのか理解できないわね…」

「『うわーん！お父様ー！今あの甲冑私を見たわ！』」

「殺してやる！今から殺してやるから動くんじゃないわよ！」

おお怖い怖い（笑）

「お嬢様落ち着きください」

「咲夜！貴女楽しんでるわね！」

…なんだ、人間らしい所もあるんじゃないか…メイド長

「まあ、実際見てたけどな、首動かして」

「やめてくれないかしら！？その晩眠れなかったんだから！」

マジかよ…

「ああ、思い出すだけでも恐ろしい！今夜も眠れないわ！」

「（全く成長していない…）」

「では、お嬢様、私が添い寝をしてあげましょう」

「眠れる気がしないわ」

あれ…このメイド長、崩壊しかけてないか？

うーん…先程の謝罪も込めて…レミイの影人形を十体ほどプレゼントしてみるか？

思いついたならすぐ実行、レミイの影から十体のレミイの影人形

「（ゴフツ）お…お嬢様が視界いっぱい…」

吐血したよ、この人、レミイ見ただけで…どういう体の作りしてるんだ？

「ちよ、貴方ね！やめなさい！気分が悪いわ！」

「だが断る」

涙目なりかけのレミイの訴え、はいはい可愛い可愛い萌え萌え

「咲夜も何か…」

「ハハハ…今なら死んでも何も悔いが残りません…」

「駄目ね、アテにならないわ」

しかし余りイジメすぎるとレミイが拗ねるので終わりにする

拗ねると面倒くさいしな

「あ…ああ……………死のう」

メイド長が絶望の余り何か意味の分からない事を言っている…が、

無視

「…んん？そういえば…フランは何処だ？」

「さあ？自分の部屋に閉じこもってるか、館の中を徘徊してると思
うわよ」

徘徊って…

閉じこもる…ねえ、まあ、話によれば随分狂っちゃったらしいから
な…

膨大な力を持った物は『壊れる』か、フランが最初に壊したのは自
分…

壊れ方は人それぞれだからな、どつかのノートを拾った新世界の神
みたいな神になるうとする壊れ方、フランのような力で楽しむよう
になる壊れ方

前者は殺しても心が痛まないが、後者の場合は普通に生活がしたい
が、自分で壊すのが怖くて、でも触れ合いたくて、板ばさみになっ
て壊れてるのが多いからな、殺すにも殺せん

ガチャリ

ドアの開く音、振り向く一同、立って居たのは

薄い黄色の髪

血の様に赤く染まった瞳

七色に光る特徴的な形状の翼

変わり果てたフランドール・スカーレットの姿があった

次回予告

「あれえ？シロちゃんだあ、ねえ？遊ぼう？ねえ？」

「やめときなさい、貴方だとはいえ、死ねるわよ」

「ご心配ありがとう、でもな、遊んでやるのが甲冑ニシキヨウの仕事なんだ」

「安心しろよ、私だって多少気がふれているさ」

「アハハハハハハ！楽しいねえ！！シロちゃあん！！」

「そうだなあ！楽しすぎて 狂っちまいそうだ！」

フラン、昔の無邪気な笑顔は何処に行ったんだよ

？

06 (後書き)

白「なんていう最終回予告」

自「まだだ！まだ終わらんよ！」

白「どうせ嘘予告なんだろう？」

自「実は本当だぜ！」

白「なん…だと…？」

自「まあ、確かに第一部完って感じだけだな」

白「つていうか導入部が終わったただけだろ？」

自「幻獣の国物語 乙！」

白「それは逃げ出すフラグとして見ていいのかな…？」

自「まっさかー、次のサイドがクロちゃんって事で全国9000人のクロちゃんファンが喜ぶだけだZE」

白「早速私は投げ捨てられるのか」

自「銀色の甲冑

壁に放り投げたー」

白「馬鹿は放つて置いて…実はアンケートを取りたいと思う、クロちゃん編の話は構成が纏まってないので、感想欄にて絡んで欲しいキャラを書いて欲しいと思うんだ」

自「ハッ！そんなに読んでる人が居る訳でも無いから無理だろ！」

白「期限は6/14の17:00までだ」

自「気軽に書き込んでください」

白「実は感想が欲しいだk(ry」

自「俺のこの手が光つてうなる！」

黒「お前を倒せと輝き叫ぶ！」

黒&自「必殺！シャイニング・フィンガアア！」

白「ちよ、クロちゃん何やつギヤアアアア…アアアア…ちくしょう…」

自「アンケートのお答え、お待ちしております！」

黒「俺をハーレムにしてくれよな！」

本人達はかなり真剣です

07 (前書き)

自「PV10000超ユニーク1300超…プレッシャーが大きすぎる…修正が必要だ」

白「実は喜んでるんだろ？喜んでないのか？…喜んでるんだろ？」

自「プランD、所謂ピンチです」

穴「呼びましたか？」

白「帰れ、何処かの機関に帰れ」

自「では、シリアスな戦闘メイン話をお楽しみください」

白「シリアル(笑)」

自「そして、申し訳ないのですが、クロちゃんが助太刀は無理です、これはシロちゃんと妹様の決着なので…」

白「アイツに出番は無い(キリッ)」

「あれえ？シロちゃんだあ、ねえ？遊ぼう、ねえ？」

私を見たまま口の端を吊り上げて、狂気に彩られた笑みを浮かべるそれは、とてもゾツとする笑みで、生き物を見る笑みではなかった自分より弱い者を見つけて嘲り笑う笑み
そして

新しい玩具を見つけて喜ぶ笑み

その二つが入り混じったような笑顔

「まさか…フランと遊ぶつもりかしら？やめときなさい、貴方だとはいえ　死ねるわよ」

レミイの鋭い声、本気で制止する為の声

確かに普通ならば断るだろう、この遊びへの誘いは…だが

「ご心配ありがとう、でもな、遊んでやるのが甲冑（シキヨウ）の仕事なんだ」
私は静かにそう言い放つ、すると、フランは先程より、一層口を吊り上げて

こう言った

「えへへ〜本当に遊んでくれるの？嬉しいなっ　でえも〜」

楽しそうに異常に成長した犬歯を覗かせながら、そう言った、目を閉じながら、本当に楽しそうに
だが

「気がふれちゃうかもよ？」

開いたフランの目は冷徹その物で、口元の笑みと相反して不気味さを、より高めている

「安心しろよ、私だって多少気がふれているさ」

その一言を聞いたフランはそれから一層口を吊り上げる

「じゃあ何する？かくれんぼ？おにごっこ？弾幕ごっこ？」

「そうだなあー、じゃあ、かくれんぼ、で行こうか　幻符『Zexion - 影を歩む策士 - 』！」

幻符『Zexion - 影を歩む策士 -』

このスペルカードは、本を使った幻術で相手を惑わす戦法を得意とする

右手に『裁きの書』という本を召喚、さらに影人形の姿を自由に操れる能力+自分の姿を影人形と同じにする効果を持つ、無論他の魔法などは同時使用できない

右手に現れた裁きの書をフランに向ける、すると、緑色の光がフランを包み、突然目の前に現れた本がフランを押し潰す、だが、これは実際に潰しているわけではない、幻術世界に飛ばしたのだ

実質的に幻術世界では私、他の影人形、すべてが同一の本に見えるため、判断は不可能に近い

よって…かくれんぼ、という訳だ

そして私もフランを追い、自分の幻術世界かりばに出る

幻術世界はどこまでも続き、黒い風がうねり、無数の黒い本が飛び交う世界だ

実際に見るのは初めてだがな

「ん〜私は本があまり好きじゃないんだよねえ、お外で走るほうが好き」

「じゃあ、外に出るか？」

「イヤ、死んじゃうもん」

「いい天気だぞ？」

そんな冗談を言いつつも影人形の本がフランへ向かって四方八方から飛ぶ

しかし、フランは軽くリズムを刻んで避けて行く

「邪魔だなあ…禁忌『レーヴァテイン』」

フランがそう言えば、どこからか両端にスピードの模様に二つ穴を開けた様な歪な形の棒が現れ、炎に包まれる

しかし、私は気にせず本の雨を降らせる、そしてよけ終わった所に

上から十字の形に本を降らせる、これにより勝敗は決した、はずだった…が

「みいつけたあ」

.....

目の前にフランがいた

そして即座に理解する、フランは避けていただけではない、本を焼いていたのだ、気がつけば他の本は全て破壊されている

「しまっ…!?!」

フランが歪な形の棒を振り上げ、一直線に振り下ろす、それは私の胸に当たる部分に直撃した

幻術世界から追い出される、フランは自分を閉じ込めていた本を焼き、外に出てくる

「ぐっ…?!一撃でこれほどの攻撃力とは…!」

随分前に気がついたのだが、私にも一応痛みを感じる感覚はあるようだ…

胸部に走る強烈な痛みを耐え、次のスペルカードを使用する

「フラン、私は炎を嫌うんだ、記憶したか?炎符『Axel-おどる火の風-』!」

そう言えば、私の両手には古代インドで使用された投擲武器、チャクラムが現れる、しかし、その形は所々に棘が飛び出しているという物だった

炎符『Axel-おどる火の風-』

炎に特化、とにかく炎に特化したスペルカード、両手に持つチャクラムは投げても自分の手元に戻ってくる便利道具

「もう!夏なんだからあまり熱いスペルは使わないでよ!」

フランは不機嫌そうに歪な棒を構えなおし、言う

いやいや、それが一番の原因だと思っただが…

フランは歪な棒を振り回し、攻撃してくる、何処で習ったのか、的

確に急所を狙って

しかし、私も負けた物ではない、その棒をチャクラムで受け流しては、カウンターを狙う

お互いに一步も引けをとらずに戦う

「…どうして彼は剣を使わないのでしょうか？確かあの剣は魔力、霊力などに少しでも関わった物なら無効化するでしたね、ならばあの剣でフランお嬢様のレーヴァティンを消してしまえばいいのでは…？」

遠くでフランと白銀の戦いを見ていた咲夜はそう言った、それに対し、私はこう答えた

「遊んでるのよ、彼も」

と…

「ハアツ…ハアツ…ハハ…ハハハ！アハハハハハハハ！楽しいねえ！！シロちゃあん！！」

「そうだなあ！楽しすぎて 狂っちまいそうだ！」

フランは狂乱の笑みを浮かべて大笑いする、

フラン 昔の無邪気な笑みは何処に行ったんだよ

！！

「禁忌『フォーオブアカインド』オオツ！！アハハハハハ！！」

次の瞬間には、フランが四人に増えていた

「オイオイ、冗談だろ？一人のお守りでも大変だったのに…四人に増えたら手の付け様がねえって！！」

「まあまあ、そう言わずに…ね？」

「続き続き！速く速く！！」

「はあ…こんなの何が楽しいんだか…」

フランの性格がそれぞれ強く出るスペルなのだろうか、各々が別々の事を口走る

「じゃあ、此方も大詰めと行くか…！！王手『チェックメイト・Knight/Night』…！！」

此方も四人に増える、しかし姿が大きく違った、

一人はチエスのナイトを連想させる姿、まあ、私だが…片手に剣、片手に盾

一人はチエスのルークを連想させる何時もより重厚な鎧に両手持ちの大剣

一人はチエスのビショップを連想させる何時もより軽装の鎧に杖

一人はチエスのキングを連想させる何時もより豪華な鎧に、片手で持てる剣を両手で持っている

それぞれが自分の撃破対象へと向かう

本体は私が直接向かう

先程とは違い、武器を受け止められないので、フランは軽いステッ
プで笑いながら避け続ける

しかし、その余裕が仇^{あだ}となった、

既に囲まれていたのだ、フランは

ナイト、ルーク、ビショップ、キング、四つの駒によって

「え…？ええ…？あれ…もしかして…負け…ちゃった？」

「無論、チエックメイト、だ、フラン」

王手『チエックメイト・Knight/Night』

影人形の装備の複雑化+身体強化+AI超強化

代償として、30秒以上使用すれば、二度と動けない体になる

「いやー遊び疲れた……もう三日は動きたくない」

愚痴を言いながらドサツと席に座る

「う…シロちゃんに負けた」

隣では文句を言いながらフランがチョココンと椅子に座る

「まあまあ、ええじゃないか、ええじゃないか」

そついいながら頭を撫でてやると目を閉じて気持ちよさそうにする

可愛いな畜生

「お疲れ様、で、貴方はどうするの？」

レミリアが若干嫉妬したような目で此方を見る、

あ、撫でて欲しいの？欲しいのね？

「帰るよ、白黒魔法使いの家にさ」

「えー！？シロちゃん帰っちゃうのー！？」

フランが目を見開いて言う、え？何？ここに住むとでも思ったのか、
貴様

「悪いな、フラン…そうだ、いい子にしてたらまた遊びに来てやる
さ」

「本当っ？って…それさあ、いい子にしてるかどうかわからないよ
ね？」

ちよ…フランさん、子供気ない事言わないで！ってかレミィより大
人っぽいじゃねえか！

「ハハハ、何言ってるんだ、私はいつでもお前たちを見てるぞ？昨
日の夕飯カレーだな？しかも無茶苦茶甘い奴」

「ま、まあ、あれはフランの提「レミリアお嬢様が中辛がお召し上
がりになれないので」咲夜アアア！！」

…やっぱりフランのが大人っぽいですよーそうですねー

「じゃあ帰るかな、マスタースパークが飛んでくる前に…」

私はゆっくりと席を立ち、帰るついでにレミィの頭に手を伸ばす
「っつ
」

超ニコニコしながら足振って超期待してるよこの子、そんなに頭撫
でて欲しいか、

可愛いな畜生！！

だがレミリアてめえは駄目だ

即効で腕を引き、そのまま帰る

「アディオス………紅魔館………！！」

次の瞬間赤い槍っぱい何か飛んできたのは言くあ wse drift g

yふじこip

07 (後書き)

白「終わってしまった…！白タイムが…！！」

自「黒になるっ」

白「馬鹿は放つて置いて…実はアンケートを取りたいと思う、クロちゃん編の話は構成が纏まってないので、感想欄にて絡んで欲しいキャラを書いて欲しいと思うんだ」

自「ハッ！そんなに読んでる人が居る訳でも無いから無理だろ！」

白「期限は6/14の17:00までだ」

自「気軽に書き込んでください」

白「そして都合上次の話は月曜日だ」

自「今の所ぶらり、人里の旅、で決定しそうだZE」

白「一票だもんなぁー！一票！！」

自「D A M A R E！これから増えて来るんだよ！多分…」

白「1mmも可能性がねえから安心しな」

08 (前書き)

白「もう……やめよう、空しいだけだ、こんなアンケート」

自「ま、まだだ！まだ終わらんよ……！」

白「こんな物でアンケートをとるアンタの気が知れないぜ」

自「じゃ、じゃあどうすればいい!?」

白「……もう、好きにすればいいんじゃないかな？」

自「な……何言つて……！」

白「書きたいんだろ？書かないとストレスが溜まるんだろ？」

自「た、確かに、この話はストレス発散の為だけに書いているが……」

白「だったらな……もうアンケートとかやめよう、無駄無駄無駄ア」

自「……人里でフリーダム……？」

白「それでいいと思うぜ、もう……無駄、だからさ……」

自「ゆうかりん、って希望もあるんだぜ」

白「無理だ、クロには荷が重過ぎる、自由発展側の人里フリーダムで行こうぜ」

私は生前、王に仕える騎士団の団長であった

しかし、私は戦場で敵に首を取られた…

そして、その後その王国は潰されたそうだが、

私は何一つ守れなかった、一人一人の命さえ

……だから、鎧に乗り移った時はチャンスだと思ったよ

富豪の家に運ばれ、幼き子供達の成長を見守る、それが楽しみだった

しかし 彼女達の成長は止まってしまった

それを見て、親達は泣いた、悲しみではなく、恐怖で

いつかは自分達が食い殺されるのだろうか？

そうなる前に殺してしまおう

教会だ、教会に任せよう

寝静まった所に銀の杭を打とう

正直私は馬鹿だと思った、だから……

まずは町内の教会の人間を殺して回った

一人、二人、三人、四人、五人、六人、七人

そして最後に 親

でも、そこまで上手くは行かなかった、動いたのだ、目の前の真っ

白な甲冑が

思わぬ誤算だった、しかし、途中で介入した親は殺せた、だが、子

供達に見られた

そして……下の子供が此方に手を開いてきて

私は下に落ちた

……
落ちたんだ

……
で、何故、落ちたのに……私は……

「また甲冑！？いい加減にしなさいよ！！」

何故……怒鳴られているのだろう

「い……いや……此方は何も理解出来てないのだが……」
正直喋れた事に驚きだ

「理解しなくていいわ、どうせ死ぬから」

……は？

目の前にいた少女は此方に傘を向けてくる、？傘？

「消し飛びなさい、鉄屑人形が」

何言っ

顔が消し飛んだ

顔が消し飛んでから何日が立っただろうか……

一週間？……全く分からない

とりあえず分かる事は……

注目を浴びている、事ぐらいだ

…何故？何故なんだ？目が覚めればゴミ捨て場、起き上がれば注目の的

『なんだ、なんだ…？』

『あーあれじゃないか？この間、河童が言っていた『えヴあ』とかいう奴』

『いやいや、河童が言っていたのは『おーとばじん』だろ？』

『なんだって？！それは本当かい！？それは乾巧という奴の所為なんだ』

『そーなのかー』

『うわあ！！人食い妖怪だあ！！おい、マジかよ、夢なら覚め（ゴキヤア）』

『か、影山ー！！ひいっ！ー！や、やめろっ！…こっちにくるなあ！
！触るんじゃねえよおおおー！！』

……うわあ、幼女が人喰ってる

…じゃない!! どう見ても助けなければ駄目だろ!!

「おい、貴様、何やって…」

「おお? シロちゃんじゃないかー久しぶりー」

シロちゃん…? ああ、あの白い甲冑の事か…知り合いか?

確か…『シルバー・ロイヤル・デュラハンドル』だったか…? 上の子がつけた名前…で、下の子が

『おk、もうお姉さまのネーミングセンスの無さには脱帽した、シロちゃんでもいいよ』

とか言っていたかな…

「つて、違う、私はシロじゃない、色違うだろう? 私は、クロだ」というより形状が違うと思うのだが…

「そーなのかー」

目の前にいる金髪の黒い服を着た少女…妖怪と呼ばれていたな…

「それより…シロを知っているのか?」

「あーシロちゃんなら多分魔理沙の家にいるぞー」

魔理沙? アイツ…何やってるんだ? 同棲生活?

「そうか、で、道順は?」

「案内するぞー」

おお? 意外といい妖怪じゃないか、口からはみ出てる足がマイナスポイントだが

「ついたぞー」

徒歩、……何分? いや、何時間?

「途中で迷ってなかったか…?」

「わはー」

駄目だ、話を聞いていない

「…まあ、ありがとう」

「おうー」

そういつて再び飛んでいく少女……飛べたのか……
しかし…ここにシロが居るのか…

『うわああああ！！助けて魔理沙！！能力も霊力も魔力も使えない！！あ、でも喋れる』

『知らないぜ、急患はえーりんの所に行けだぜ』

『誰それ！？喰えんの！？』

『喰えたとしてもお前に口が無いぜ』

あれ……？私の記憶ではシロは仁義深くて、高貴で、気高い騎士だったような……

『まあ……喋れるからいいか……』

『お前の折れやすさは世界一だと思っぜ』

……とりあえず訪ねてみるか

コン、コン

ドアを軽く二回叩く

『アリスだ！！アリスが来たぞ！！』

『不味いんだぜ……！！やっぱ昨日の事怒ってるっばいぜ……！！』

『仕方ないだろう！！脇晒しやりたかったんだから！！』

『やり逃げが不味かったんだと思うぜ……』

『よし……作戦はこうだ、私が逃げる間に魔理沙が彼女を食い止める』

『ほう……私に何か利点があるのか……？』

『私は無事逃げ延び、魔理沙はアリスに両方の意味で襲われるだけ、

おおっ！！利点しかねえ！！』

『最低だぜ、お前』

『我々の業界では褒め言葉です』

『すまない、私だ、クロだ、とりあえず開けてくれ』

『クロ……って、あれだろ？スカーレット姉妹を無理やり襲ったって

いう……ロリコンの……』

『ああ、そうだ、最低の鉄屑だ』

……やってないのだが……

『気を付けるよ、魔理沙、どうやら腋巫女も襲われたらしいぞ、次の日はずっと笑いなから掃除していたっ……』

……やってねえ！！

『…ついこの間、鴉天狗も襲われたらしい』

「いい加減にシロよ！！」

「何それ！？上手いつもりか！？このクロリコンが！！」

「混ぜんな！！」

「殺るか！？」

「殺つてやるぜ！！能力も霊力も魔力も…実は使えるけどなあ！！」

「なっ…！？」

「ハハツ！！…能力と霊力は本当に使えないが…一回でいいからえーりん！！えーりん！！つてやりたかった…！」

実は…犬猿の仲だ、私達は

「今じゃ私は魔法使い！！さしずめ、『魔法を扱う程度の能力』！！」

「甘すぎる…！！私の能力（ここにくる途中でいろいろあつて判明した、異論は認めん）、残念だが…！！私も『魔法を扱う程度の能力』！！」

「何イ…？若干…分が悪いな、今では…影人形も作成できない、武器達も消え去つた…使える魔法も光属性だけ…畜生…！」

「安心しろ…私も闇属性の魔法しか使えないさ」

シロ

クロ

清純を示す白

汚れを示す黒

何色にでも染まる白

何色にも染まらぬ黒

何色にでも変わる光

何色にも変わらぬ闇

「仕方が無い…決闘だ、シロ…！」

「残念ながら、私の本名は白銀星雲だ」

「ふうん、私の本名は…黒金夜空…だ、あの人形造り…なんてネーミングセンスだ…」

「で、何が目的だよ黒金」

「一度…誤りたいんだ、フランとレミイに…」

「やーめーとけ、あいつ等、かなり強くなってるぞ？私もフランに殺されかけた、今の状況では絶対勝てない」

「死んだら…その時はその時さ、では…行かせてもらおう！闇術『月夜の大量殺人』！」

「不意打ちかよ！！騎士道踏み外してるなあ…！！光術『曇りなき星雲』！」

両方とも、上空から降り注ぐタイプの弾幕でした

甲冑二人が争っている時

「楽しかったかしら？フラン」

「うん！シロちゃんには会えなかったけど…楽しかった！」

「そう、それならいいわ…」

傘を持って、肩を並べて歩く二人の少女、ルミア・スカーレット、フラン・スカーレットの姿がそこにはあった…

そして、反対側には宙に浮く、黒い塊

「ん？お姉さま、あれ、なんだろ」

「知らないわよ」

興味津々のフランに対し、全く興味のなさそうなレミア

「じゃあ遊んできていいかな！？」

「はあ…いいわよ、ただし…」

「壊さない程度にね」

レミアの重い一言、だが、この場にはシリアスだかなんだかという場の空気を読む人物は居ないので、無意味

「重々承知」

「本当に分かってるのかしらね…？」

『ねえねえ〜遊ぼう？』

『いいぞーその前に食物をくれたらなー』

黒い塊が無くなると、その場に居たのは金髪に黒い服のルーミア、
だった

『あー持ってないや』

『む、じゃあ遊べないなー』

『え〜……遊んでっば〜』

そう言いながらルーミアのリボンを引っ張るフラン

『や〜め〜て〜リボンは引っ張って欲しくないぞー』

嫌がるルーミア、この場合、妖怪同士の力で、一つのを引っ張り合ったらどうなるか、答えは単純である

ブチッ

千切れる

『あ……ごめん、リボン、壊しちゃった』

『ああー……お気に入り……ボ……ン』

『あれ？どうかした？』

……

『いえ、全く問題は無いわ、むしろ快調ね、快調』

先ほどのルーミアとは口調などが全く違う、とても深くて、冷たい
闇、そんな物を連想させる声

『じゃあいいけど……』

フランは気に留めなかったが、レミアはその口調の変貌に気が付
いた

『待ちなさい、貴女……』

『何？吸血鬼如きが私を引き止めるの？有り得ないわ』

『吸血鬼如き……？』

自分の代名詞である吸血鬼を侮辱され、若干怒りを覚えるレミア

『あら、殺気立ってるわね、こういうのを解決するのに……弾幕ごっ

こ、があるんでしょっ？』

レミアとルーミアは、お互いを威圧し合っている

「……でも、日光が出てては本気を出せないわね……夜にしてあげるわ」
ルーミアがそう言い放つと、あたり一面が暗くなり、一瞬で夜となる

「なっ……！？最初に見たときにここまで強大な力は感じなかったわよ……っ！」

「さあて、やりましょうかね……貴女は……」

「貴女は食していい生物？」

08 (後書き)

クロちゃん編 結果

EXルーミア

正直悪かったと思っている

08・5(前書き)

主に今までの設定のまとめ
恐らく話が進むと追加されます

本編主人公

【白銀星雲】ノシロノシロちゃんノ気高い騎士ノ高貴な変態ノ頭が
無い騎士ノデュラハンノ悪魔の甲冑

現世で有名な人形職人に作られた甲冑、しばらく前から自我を持ち始めた

つい最近まで、霊力、魔力をかなりの高レベルで扱い、チート級になっ
ていたが…

紅魔館から出る時に激情したレミアアの 神槍『スピア・ザ・グン
グニル』に撃たれ

姿の維持が出来なくなり、能力と霊力で姿を維持しており、ただの
魔法使いに成り下がった

しかし、デュラハンという事もあり、しぶとく、剣術もそれなりな
ため、結構な戦力になっている

地味に料理が得意

スperlカード

光術『曇りなき星雲』

上方から大量の光弾を降らす

攻撃力はそれなりで、広範囲の攻撃と、相手の動きを封じる役目がある

光術『輝ける星光』

一直線に光線を発射する

攻撃力は高め、マスタースパークの20%程の威力

主に 光術『曇りなき星雲』で相手の体力を浪費させてから使用する

光術『夜に輝く太陽達』

低速の誘導光弾をばら撒く、威力は高いが、滅多にあたらない
こちらも 光術『曇りなき星雲』で相手の体力を浪費させてからの
使用が多い

逆光『打ち消される光』

相手の周りの光という光を全て屈折させ、暗黒地帯を作り出す
主に逃走用

聖砲『ダモクレスフォトン』

自分に光で出来た翼を生やし、飛行可能になる上、翼から超強力な
光線を打ち出す

使用後、一週間は意識不明になる
リスクも高く、使われる事は滅多に無い

本編主人公2

【黒金夜空】ノクロノクロちゃんノ残虐な騎士ノ残虐な変態ノ頭が
無い騎士ノデユラハンノ悪魔の甲冑

現世にて、戦死した騎士の魂が鎧に乗り移った物、随分前から自我
を持っている

現世のスカレット家で、姉妹の両親を殺害、その他、町の教会の
人間も殺害していた

しかし、これは全て姉妹を守る為の行為であったが、依然、姉妹に
は親殺しの名を着せられている

スーパーカード

闇術『月夜の大量殺人』

上方から大量の闇の塊を降らす
攻撃力はそれなりで、広範囲の攻撃と、相手の動きを封じる役目がある

闇術『翔ける暗雲』

一直線に光線状の闇の塊を発射する

攻撃力は高め、マスタースパークの35%程の威力

主に 闇術『月夜の大量殺人』で相手の体力を浪費させてから使用する

闇術『追い続ける殺意』

低速の誘導性の高い闇の塊をばら撒く、威力は高いが、滅多にあたらない

こちらも 闇術『月夜の大量殺人』で相手の体力を浪費させてからの使用が多い

白夜『打ち消される闇』

相手の周りの闇をすべて打ち消し、相手の目を潰す
主に逃走用

闇砲『パニツシユメント』

自分に闇で出来た翼を生やし、飛行可能になる上、翼から超強力な闇の塊を打ち出す

使用后、一週間は意識不明になる
リスクも高く、使われる事は滅多に無い

以下、細かい設定のような物

Q・デユラハンって嘘つかないんですか？

白「当たり前だ、何を言っているんだ、君は」

黒「時々嘘ついてるよな？お前」

白「ハッ！！私はデュラハンではないからな！！」

黒「…つまり、嘘をつかないのは私だけだ」

Q・シロちゃんロリコン？

白「悪い、私は魔理沙一筋だ」

黒「嘘付け」

Q・クロちゃんロリコン？

白「どうなんだ？」

黒「ロリコンだぞ？」

白「嘘……だろ……？」

黒「デュラハン嘘つかない、コレ本当」

白「騎士は母性愛を持ち合わせている、別に性的対象として少女達を見ているわけじゃ無いぞ」

黒「……というより、ここに住んでいる奴等、殆ど100歳超えて
いるだろ」

白「そうだっ！！つまり、性的対象として見てOKという」

黒「屁理屈だな」

Q・何で幻想入りしたん？バカなの？死ぬの？

白「馬鹿野郎、幻想入りしなければ話が始まらねえだろ」

黒「アリス・ゲームでもやっつけ」

白「ハサミの子が怖いからヤだ」

Q・お前等の中身なんだよ

白「中身……？それはねえ……？黒金え？あはははは……」
黒「そつだよなあ…… 白銀…… あはははは……」
白&mp;黒「中に誰も居ませんよ？」

09 (前書き)

？ですが、彼女は出ません

白銀のそっけない返事

「心配じゃないのか!？」

「えーいや……あの姉妹なら大丈夫だろう……」

「そんな甘い考えの白銀星雲さんに朗報です」

突然の声、……敵か？

「ま、まさかその声は……!」

「どうも、御久し振りです、私です。清く正しい射命丸です」

「ぶっ殺せ!! 奴をぶっ殺せ!!」

「今日の晩飯は焼き鳥だぜ!!」

二人がトランスしてしまった……

「あやややや……まだ根に持つてるんですか?あの新聞」

「当たり前だぜ!!あれ以降アリスが家に盗聴器つけたり、監視力メラつけたり、散々なんだぜ!？」

「そして私も恨みを買って、会うたびに殺されかけるんだ!!」

……彼等に何があつたのだろうか……

「魔理沙さんの言い分は分かりますが……白銀星雲さんの場合、自業自得じゃないでしょうか?そして、時にお二人方、最新号をどうぞ」

そういつて、射命丸といわれた少女は一枚の紙を渡す……確か、シンブン、と言ったか……?

「『遂に白甲冑、人形遣いに手を出す』……おい!!撮られてたのか!?あの光景!これは不味いぜ……」

「不味いねえ、これは不味いねえ!!畜生!敵が増えたよ!」

……何をやっているんだ……白銀は

「……落ち着け、で、射命丸殿……朗報とは一体……?」

「むむ、新手ですね……黒甲冑……」

「私の名前は黒金夜空、よろしく頼む」

「ええ、この出会いがお互いにとっていい物になりますように」

なんだ……普通に社会的な常識人じゃないか……人ではないか

「案外普通じゃないですか、あちらで殺気立っている甲冑とは違っ

て」

「私の場合は普通の出会いじゃなかったらうが！！マスゴミが！！」
「む、マスゴミとは失礼な…」

白銀と射命丸殿との間に一体…何が…

「…朗報でしたね、ええと、紅魔館のメンバー全員が戦闘中ですよ、しかも劣勢」

「は…？何言ってるの、このマスゴミ、脳味噌までカビたか」

「いえいえ、本当ですって、行ってみて下さいよ、本当ですから」

惨状、だった…いざ来てみれば、死に掛けのレミィ、フラン、メイ
ド長の…十六夜咲夜殿、レミィのご友人のパチエリー殿、門番の紅
美鈴殿、

全員がかなり危ない状態だった…射命丸殿が医者を呼んでくれな
ければ…終わっていたらしい

「一体…誰が…」

ちなみに…レミィとフランは私の行動を理解してくれて、どう
やら、私と白銀が飛ばされた後、町内の人間が攻め込んで来たら
し
い…

馬鹿げてる…

レミィからは『ありがとう』

フランからは『ごめんね』

その言葉を頂いた

和解できて一安心、という所だろうか…

「信じられん、紅魔館組みがこうも抑えられんとは…」

「本当よ…何なのよアイツ…」

「誰にやられたんだよ？こんな酷いと…かなりの相手だろう？」

「えつとねー…『そーなのかー』って言って両手広げてる子」

フランがそういう……それ…

「ルーミア（先生）？」

あ、そういえば白銀は知り合いだったか…

「え？ちよ？何？ルーミア先生知ってるの？渡さないからな！？」
「いらん」

なぜ必死になるんだ…？…え？何？

「んー違うよなあ…ルーミア先生はそこまで強くないし…」

確かに、そこまで凶悪そうに見えなかつたな…

「はあ…？あんな化け物がそこまで強くないって…シロはどこまで自信家なのよ…？」

「え？だって、あの人、あれでしょ？強そうな能力を持っているのに一面のボスで、弱いつていう出オチボスでしょ？」

「メタは止めようぜ」

結局、この後、しばらく相談し、結果的にレミィが『倒してしまっても構わんのだろう？』

とか言い出した為に、ルーミア？撃退作戦が立てられた訳だ…

参加メンバーは

紅魔館一同

白銀星雲

私

魔理沙殿

射命丸殿

だ、射命丸殿はネタになる、と、魔理沙は異変は私の専門だぜ、と言った

一体…勝てるのだろうか？いや、その前に、誰なのだろうか？本当にルーミアなのだろうか…？

09 (後書き)

お察しの通り、EXルミアです

10 (前書き)

自「赤と黄色と緑を混ぜた生き物、なーんだ？」

白「……魔理沙？」

自「どうしてそうなった？」

「なあ、白銀、紅魔館を襲撃した奴、何だと思う？」

「んー？気にすんなよ、どうせ今射命丸が居所を調べてるんだろ？
見つけたときでいいじゃないか」

「なあ、白銀、お前…口調変わってきてないか…？」

「あーそうかもなー…多分…周りに影響されてるんだろ？
私もそうなるか…？それは嫌だな…」

創造してみてください、軽口を叩くデユラハン

面妖な…

「いやさ、私ははつきりしないものが嫌いだな、予想でいいから言
って欲しいんだぜ」

その一言に、白銀は重い口を開いた…口無いが

「…過去に呼んだことがある…その本のタイトルは【御母惨吐一
緒】…その中で、最悪の魔女【消虚御姉惨】という奴が居た、そし

てそいつが創造した悪魔…【スプー】…奴かも知れないな…」

スプー…だと…！？それなら…幻想郷が危ない！！地球も危ない！！

…あれ…？私も少し壊れてきて…

「シロ！！その話はやめて！！今日も…また眠れなくなるじゃない
…！！」

そういえば…そんな事もありましたね

「じゃあ、私が添い寝してあげましょう、お嬢様」

「寝れる気がしないわ」

…？デジャブ？

「または…奴かも知れんな、昔東国で聞いたことがある、あの…
道化師のことを…名前は…【ドナルド】…と言ったか？奴の【乱々

流一】あれは…恐ろしい呪文だ…」

あの話は恐怖の頂点に君臨する…

「あ！私、あれかも！昔、本で読んだ、えーっと…【地獄兄弟】？

つて本に載ってた【^{ヤグルマ}矢車】つて奴」

フランがそういう…地獄兄弟？…ありえるのか、そんな物が…
「…！そういえば、私が人里で小耳に挟んだ話ですと…最近【妖怪
ぼたんむしり】という物が猛威を振るっているとか…【その命…神
に返しなさい！】といって襲い掛かってくるとか…」

咲夜殿…そろそろやめないと…

「あー！もうやめてよね！？泣くわよ！？」

半分涙目のレミイが言う

「どうぞ、この咲夜の胸で泣いてください」

「イヤ、違和感があるから」

違和感…？ああ、そういえばPADを常備しているんだっただか…

「じゃあこっちだレミイ！！…ここに避難しろ！！」

「イヤ、死ぬほど冷たい上に痛い」

そりゃあ…甲冑だもの…

「では私の元へ！そんな甲冑の言葉に乗っては駄目です！」

「いいや！…ここに来い！…そっちはPADだぞ！」

「何言ってるんですか！…こっちです！」

「…こっちだ！」

「…こっちです！」

血走った目（…白銀は無いけど…）でレミイを誘う二人

「じゃあ…シローっ！皆がイジめるよう！」

「ゴフツ……ば…馬鹿な…」

吐血したよ、選ばれなかつただけで吐血したよ、このメイド長

「ハハハハ、もう大丈夫だぞー私がつい^{スキャアアア}てうわ、ちよ、マスクあw

se dr f t g y ふじこーp」

今のは…マスタースパーク…？

「…んん、悪い、手が勝手に…」

白銀は…駄目だ、ぎりぎりまで防御している、死んでいない…

「お嬢様の信用さえ……価値はない……いいナイフ……殺らないか

…」

咲夜殿は錯乱している！……大丈夫か？これ？

駄目ですよ

「只今帰りましたー、私です。清く正しい射め……」

……

「お、興>遅かったじゃないか……」

「待つてください、今北産業」

「怪談話

れ み り あ うー

咲夜さん吐血」

「すみません、把握できませんでした……」

見てても把握できなかったからな……

「で、犯人の居場所は分かったのか？」

「あ、はい、ええ、今は……人里に居ますね、妹紅もこうさんやらが応戦してますが……あと数秒持つか……あ、今頃敗北してますね」

「じゃあ、ゆっくりしてる場合じゃないだろう！？行くぞ！」

外は夜、深夜、まったく……困った物だ……

この夜は、実際に時間の夜じゃない、大きな闇が包んでいる感じだ

人里に降り立ち、最初に見た物……

「知らない天井だ……」

「違う！！」

大量の死体……は無かったが、その代わり……町の殆どが壊されていた……で、先ほどの妹紅殿がどのような人物かは知らないが……人っ子一人の姿も見当たらない

「あら、誰かが来たかと思えば……この間の愚かな吸血鬼とその仲間達ね？」

闇の奥から聞こえる声、ルーミアの物

金色の髪、ルーミアの物

黒い服、ルーミアの物

赤い眼、ルーミアの物

「ば…馬鹿な…ルーミア先生がここまで強いとは…」

「ルーミア、ねえ…まあいいわ、それで」

しかし、雰囲気、口調、何もかもが違う、少なくとも、私の知るルーミアではない…

「この事件、真相が見えてきたぜ…」

魔理沙殿が得意げに言う

「ルーミアのリボン、無いだろ？」

…言われてみれば

「あのリボンは…あいつの力を封印していた物なんだが…何かの拍子に取れたんだぜ、きつと」

「なるほど、大体分かった、でどうすりゃいい？」

「私が霊夢を呼んでくるから、その間抑えといてくれればいいぜ」

「何秒抑えられるか分からないぞ？」

白銀が真剣に言う、こういう時、コイツは普段とのギャップがあるから格好いいんだろうな

「幻想郷最速の私を舐めると危ないぜ？」

そうなのか…実は凄い人なんだな…

「最速は私ですけどねー」

え？あ、そうなのか…実は凄い妖怪なんだな…

「決着、付けるか？」

「いいですよ？負けたら明日の新聞に堂々と載せてやりますよ」

「じゃあ…ゴールは博霊神社だぜ？」

おーい、盛り上がる場所間違ってるよー間違ってますよー

「美鈴、咲夜、パチュリーあなた達は人の誘導をお願いするわね」

レミィ、一つだけ言わせてくれ、これ以上戦力が減ったら…一秒抑えられるか分からないのだが…

「な、何故ですか？！」

「紅魔館のイメージアップよ」

「分かりました、では、お先に失礼させていただきます」

理解しちゃったよ…このメイド長…と、門番…と…紫もやし

結局残るのは…私、白銀、レミイ、フラン、だけだ…

普通に考えれば…十分なのだろうが…

今回は訳が違う…

一度、レミイ、とフランは惨敗している

「馬鹿よねえ…ああ、馬鹿だわ…これ以上に無いって位馬鹿ね」

まったく別人へと変貌したルーミアがそう言う、本当にルーミアなのか？

「さてさて…貴方達にはこれで十分じゃない？深淵『トコヤミ常闇ノ皇』スメラギ」
ルーミアはそういいながら、一枚の札のような物を投げる

「貴方達！気をつけなさい！あんな奴が使うスペルカードよ、何が来るか分かった物じゃないわ！」

レミイがそういい、私達は即座に距離をとる

すると、先ほどの紙は周りの闇を吸い込み、巨大な球体に赤と灰色のラインの入った物が表れる

「おい、マジかよ…あれ…あれじゃないか！？【ヒヤツキヤコウエマキ】って奴の最後に載っている奴！！」

「さてさて、常闇君、今回は犬に簡単にやられたみたいだけど…今度はそうは行かないよね？」

「当たり前ダ…犬畜生ナド二負ケタ事実八我ノ最大ノ汚点、二度ト、
コノ【皇】ノ名ヲ汚シハシナイ」

暗い闇に響く声、いや、暗い闇のような声

「あつ、そ、じゃあ…お願いするわ、私は力を取り戻す」

そういつてルーミアは後ろに下がる

「…白銀、お前の剣で消せないか？」

「あー無理だ…あそこまでデカイと…あれは魔の力、なんてチャチな物じゃない、もはや…世界の基準だ」

「そうか…」

しかし…東国で恐れられていた最強の妖怪が…まさか…一人の妖怪の式神だったとは…

「理解できんな…あんな恐ろしい物が式神だとは…」

「ふん、何が東国最強よ、それならこっちは西洋最強の吸血鬼よ？
負けるはずが無いわ」

「黙レ、貴様モアレダロウ？最近流行ノ『ネコミミ』トヤラノ類ダ
ロウ？『コウモリ羽』？」

「なんだ、案外可愛いじゃないか、…待て、あいつは敵だ…落ち着け
…壊れるな…」

「違うわよ！ちゃんと肌から生えてるわよ！！」
「でしようね」

「フン、貴様ラノ言イ分等聞イテオラン」

「じゃあ何故疑問系だったのか、と」

「腹立つわね、コイツ」

「同意」

「お姉さま、あのボール、遊んでいいのかな？」

「いいんじゃない？」

「ボール扱い…フラン、未恐ろしい子…！！」

「おいおい、無理だつて…コイツ…アマテラスオオミカミ天照皇大神が無茶苦茶苦戦した
末に勝った相手だぞ！？模擬品であつても力はかなりの物…正直、

私達には無理だ…」

「白銀が弱音を上げる、まあ…コイツから感じるプレッシャーは恐ろ
しい物だな…フランは楽しんでいるようだが、レミイは若干震えて
いる…」

「諦めんなよ！諦めんなよ！何で諦めるんだそこで！頑張れ！頑張
れ！出来る出来る絶対出来る！！」

「…私は、何か大切な物を忘れていたようだ…！！」

「剣を持ち、立ち上がる白銀、そうだ、それでこそ…お前だ

「行くぞ！レミイ！フラン！クロ！」

「フン、虫ケラガ…私ニ勝テルトデモ…」

「Go To Hell…！！」

「常闇の皇を白銀が飛び掛り、そのまま斬る

「…！！？グアアアア…」

真っ黒になつて落ちた

……

「……」

「……」

「……弱ッ！！」「……」

「え？何？ちよ？よ、弱ッ！！東国最強弱ッ！！」

「れれれれれ冷静になれ……これは罠だ、罠なんだよな！？なあ！！」

「あ、あれよ！！このあと機皇帝とか召喚されるのよ……！！」

「お姉さま、それは違うカード」

各々全員があまりの弱さで驚く、たとえるなら……エスタークのH

Pが1だった時のような感触

「あら、負けたのね……やっぱり……この形態は役に立たないわね……

次よ次、ほら、頑張りなさい、少し分けてあげるから」

そっうい、ルーミアが、常闇ノ皇に手をかざす

「へ力能ルス作操異地変天

リヨ力能ルス作操厄災

更変識常ノ力能ノ神式ノ我」

……何語？

「今のは……間違いなく、古文を逆転させているだけだ……！！……分解してみると……」

『私の式神の能力の常識を変更します

災厄を操作する程度の能力から

天変地異を操作する程度の能力へ』」

「お前……なんで、そんなに東国に詳しい……？」

「聞いちゃいけないんだぜ」

笑顔が怖い……

「つて待て、天変地異を操作する程度の能力！？それってかなり不

味いんじゃない……」

とか言っている間に……

「……第二形態ヲ飛バシ第三形態へ……無理ヲサセル……」

先ほど異常なほどの弱さを見せ付けた常闇ノ皇が姿を変え、再び立ち上がる

その姿は…球体から手が出ているような感じだ
そして、赤色だったラインは血の様な色へ…

「先程マデノ我ノ姿八言ワバ政治ノ為ダケニ存在スル姿、ソシテ今ノ姿八言ワバ戦闘ノ為ダケニ存在スル姿」

「誰も頼んでいない説明有難う」

「あー私も参戦するわ、面倒臭いし」

そういつてルーミアが前に出る

「ここからが本番っていう事か…」

「なあ、黒金…私…負ける気がしない…!!」

「私もだよ、白銀、行こうか」

「ああ!!」

この戦いが幻想郷の存亡を掛けた戦いだと知ったのは一カ月後である

10 (後書き)

白「なあ…常闇ノ皇って…」

自「You!!それ以上言うんじゃない!」

白「…了解」

自「君に朗報だ、実は…次回でクロ編終了だ」

白「私の出番来た!!これで勝つる!!」

自「騙して悪いが、三人目の主人公の登場だ、諦めてもらおう」

白「なん…だと…!!?」

自「知ってるか?主人公は常に三人居る物だぜ…?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8002/>

東方甲冑劇

2010年10月20日19時54分発行